

令和元年度 厚生労働省看護職員確保対策特別事業

保健師の資質向上及び確保に
向けた調査・分析事業

報告書

調査実施者

一般社団法人 全国保健師教育機関協議会

会長 岸恵美子

令和2（2020）年3月

はじめに

一般社団法人 全国保健師教育機関協議会
会 長 岸 恵美子（東邦大学）

本書は、厚生労働省医政局の令和元年度（2019年度）「保健師の資質向上及び確保に向けた調査・分析事業～保健師助産師看護師国家試験評価改善事業～」として、一般社団法人全国保健師教育機関協議会（以下、全保教）が受託し、実施した研究に関する報告書です。

今般、急激な少子・高齢化の進行や地域力の弱体化等、地域保健を取り巻く課題は多様化、深刻化しています。効果的な保健活動においては、各種データを有効に活用し、根拠に基づいた計画の策定・実施、評価が求められています。保健師は地域の実情に精通する保健・医療の専門職として、地域の健康課題を分析・評価し、その特性に応じた対策を施策化する重要な役割を担う専門職です。地域包括ケアシステムの強化のために、今後、市町村域において、分野を超えて地域生活課題について総合的に相談に応じ、複合化した地域生活課題を解決するための体制整備の役割が保健師に求められています。

全保教は、全国 216 校（2019 年 8 月末現在）の保健師教育機関からなる団体で、ブロック活動及び委員会活動によって保健師教育の充実を図り、公衆衛生の向上に寄与しています。国家試験委員会においては、毎年の保健師国家試験の出題内容に関する意見をとりまとめ、保健師国家試験の質向上に向けた活動、国家試験問題作成のための研修会を実施し、教員の問題作成、クリティーク、ブラッシュアップの能力を育成することなど、保健師教育の充実と教員の資質向上に取り組んでいます。

保健師助産師看護師（以下「保助看」とする）国家試験は、保健師助産師看護師法 17 条に基づき、それぞれ保健師、助産師又は看護師として必要な知識および技能を評価するものであり、社会の変化や看護を取り巻く環境の変化に合わせて定期的に改善を行っています。平成 28 年 2 月の保助看国家試験制度改善検討部会報告書より、保健師国家試験においては「社会背景を踏まえ地域住民や他職種・他機関と連携・協働しながら、健康課題を解決すること及び施策化することなど保健師に求められる役割や能力についての出題内容の充実が必要」とされています。改善部会の報告書に基づき、保健師に求められる能力を評価する試験問題を作問するためには、問題文に記述する対象の健康課題、個別情報等より多くの情報量を問題に組み込む傾向にあり、受験生には長い状況文を読む時間が必要とされています。

本研究では、保健師国家試験が保健師の実践能力を問う問題となっているかを評価するために、2つの研究を実施しました。研究 1. では、保健師国家試験の量的分析として、過去 10 年分の保健師国家試験問題と過去 5 年分の看護師国家試験および助産師国家試験を量的に比較して分析しました。分析の結果を考察し、保健師国家試験を評価し試験問題作成への提言を行いました。研究 2. においては、全保教の国家試験委員会の

活動成果である国家試験の分析結果を活用しました。またその分析に際しては、毎年会員校に実施している Web 調査による保健師国家試験に係る問題内容調査の結果が基となっております。

ここに、これまでの国家試験委員会委員の皆様、会員校の皆様に改めて心より深謝申し上げます。本報告書が、今後ますます多様化する健康課題に対応できる実践力のある保健師を養成するための保健師基礎教育改善の一助となれば幸甚です。

目次

はじめに

研究 1：保健師国家試験問題の量的分析	1
1— 調査・分析の目的.....	1
1 調査・分析の目的	1
2 調査・分析の前提	1
2— 調査・分析の内容および方法.....	2
1 調査・分析の対象	2
2 調査・分析の内容および方法	2
3— 調査・分析の結果.....	3
1 出題形式の推移.....	3
(1) 出題形式	3
① 保健師	3
② 助産師	4
③ 看護師	4
④ 職種間の比較	5
(2) 問題の種類	5
① 保健師	5
② 助産師	6
③ 看護師	7
④ 職種間の比較	7
(3) 数値回答以外の出題形式における問い.....	8
① 保健師	8
② 助産師	9
③ 看護師	10
④ 職種間の比較	10
(4) 評価領域分類 (Taxonomy)	11
2 文字数の推移	12
(1) 総文字数	12
① 保健師	12
① 助産師	13
② 看護師	14
③ 職種間の比較	14
(2) 一般問題の文字数.....	15
① 保健師	15

② 助産師.....	16
③ 看護師.....	17
④ 職種間の比較.....	17
(3) 状況設定文の文字数.....	18
① 保健師.....	18
② 助産師.....	19
③ 看護師.....	20
④ 職種間の比較.....	20
(4) 図表点数.....	21
① 保健師.....	21
② 助産師.....	22
③ 看護師.....	23
④ 職種間の比較.....	23
(5) 問題文内の表の文字数.....	24
① 保健師.....	24
② 助産師・看護師.....	25
3 合格率の推移と文字数との関係.....	26
(1) 合格率の推移.....	26
① 保健師.....	26
① 助産師.....	27
② 看護師.....	28
(2) 文字数との相関.....	28
4— 考察.....	29
1 保健師助産師看護師国家試験の出題状況.....	29
(1) 出題形式.....	29
(2) 問題の分量としての文字数.....	29
2 保健師国家試験の特徴と課題.....	30
(1) 出題内容.....	30
(2) 状況設定問題について.....	30
(3) 出題形式について.....	30
(4) 評価領域分類 (Taxonomy) について.....	31
(5) 視覚素材・図表について.....	31
研究2：保健師国家試験問題の質的分析.....	32
1— 調査・分析の背景・目的.....	32
1 調査・分析の背景.....	32
2 調査・分析の目的.....	32
2— 調査・分析の内容および方法.....	33

1 調査・分析の対象	33
(1) 調査・分析 1	33
(2) 調査・分析 2	33
2 調査・分析の内容および方法	33
(1) 調査・分析 1	33
(2) 調査・分析 2	33
3— 結果	34
1 調査・分析 1	34
(1) 良問として選定した問題の出題傾向	34
2 調査・分析 2	40
(1) 状況設定単問の概要	40
(2) 各問題の分析結果	41
4— 考察	47
1 保健師国家試験全体から見た良問の特徴	47
2 保健師国家試験における良問の特徴と課題	48
(1) 出題内容について	48
(2) 状況設定問題について	48
(3) 出題形式について	48
(4) 評価領域分類 (Taxonomy) について	49
(5) 視覚素材・図表について	49
3 状況設定単問の特徴と課題	49
(1) 単問の状況設定問題について	49
(2) 状況設定問題での良問の要件	50
5— 研究のまとめ	51
1 保健師国家試験の改善に向けて	51
(1) 実践力を評価できる問題の作成に向けて	51
(2) 論理的思考と推論および判断力を評価できる問題の作成に向けて	51
(3) 実践力を問う問題とするための提案	52
(4) 分析の課題	52
総括と提言	54
1— 保健師の質向上に向けた保健師国家試験の課題と提言	54
1 保健師教育と保健師国家試験	54
2 保健師の質向上に向けた保健師国家問題において改善すべき事項	54
(1) 出題領域について	54
(2) 評価領域分類 (Taxonomy) について	55
(3) 文字数について	55
(4) 出題形式について	56

(5) 時代の要請や複雑化した課題について	56
3 実践能力を問う保健師国家試験問題作成のための保健師基礎教育の課題	57
4 保健師国家試験問題の出題形式の検討と今後の課題	57
おわりに	59

研究 1：保健師国家試験問題の量的分析

1—— 調査・分析の目的

1 | 調査・分析の目的

保健師助産師看護師（以下「保助看」とする）国家試験は、保健師助産師看護師法 17 条に基づき、それぞれ保健師、助産師又は看護師として必要な知識および技能を評価するものであり、社会の変化や看護を取り巻く環境の変化に合わせて定期的に改善を行っている。

平成 28 年 2 月の医道審議会保健師助産師看護師分科会「保健師助産師看護師国家試験制度改善検討部会報告書」（以下、改善部会報告書）より、保健師国家試験においては「社会背景を踏まえ地域住民や他職種・他機関と連携・協働しながら、健康課題を解決すること及び施策化することなど保健師に求められる役割や能力についての出題内容の充実が必要」とされている。これらの報告書に基づき、保健師に求められる能力を評価する試験問題を作問するためには、問題文に記述する対象の健康課題、個別情報等より多くの情報量を問題に組み込む傾向にあり、受験生には長い状況文を読む時間が必要とされている。

そこで今回は、保健師国家試験の過去の問題文の文字数を測定し、助産師・看護師国家試験の問題文の文字数と比較検討することや、出題方法・形式等などの情報量を評価することで、今後の試験問題作成への提言を行うことを目的に調査・分析を行った。

2 | 調査・分析の前提

平成 28 年 2 月にとりまとめられた改善部会報告書では、出題基準について、小項目が「中項目に関する内容をわかりやすくするために示したキーワードである」ことを踏まえて「出題範囲となる事項である」中項目の記載の抽象度を工夫するとともに、膨大な知識の中でどの範囲を国家試験で問うのかということを明確にするような中項目の記載の表現の工夫が必要であると提言されており、こうした提言を受けて平成 30 年には出題基準の改定がなされている。全体的な改定の方向性は、以下にあげる 3 点である。

- 人口・疾病構造や社会背景などを踏まえつつ、近年の保健・医療・福祉の実情など看護を取り巻く状況の変化に伴い、より重要となる教育内容に関する項目の精選と充実を図る
- 科目や分野における各項目について、どの範囲を国家試験で問うのかということを明確にするような中項目の表現の見直し（一部、科目の特性や体系整理等から中項目の表現の抽象が高い場合には、大項目の表現と併せて出題範囲が明示されるよう工夫）
- 各職種に求められる専門性の高度化とニーズの多様化や、免許取得時に求められる実践能力を問うために各職種の特徴を反映して出題するよう、各職種に求められる実践能力と卒業時の到達目標との整合性について留意しながら、改めて体系や項目を見直し

このほか、保健師国家試験は地域住民や多職種・他機関と連携・協働しながら健康課題を解決すること及び施策化すること等の保健師に求められる役割や能力、並びに医学や公衆衛生学を含めた公衆衛生看護活動の根拠となる知識などについて、助産師国家試験は助産診断・技術学、助産管理、及び近年推進されている院内助産所や助産師外来において求められる、より高い助産診断・ケア能力について、看護師国家試験は健康課題を持つ人々を生活者として捉え、身体的・精神的・社会的に統合された存在として幅広く理解した上で、個人や家族及び療養の場の多様化に併せて、必要な看護サービスを提供するための知識や能力について、それぞれ出題内容の充実を図るよう改定が

行われている。加えて助産師については、女性のライフサイクル各期における健康、リプロダクティブヘルス/ライツ、妊娠・分娩・産褥と新生児・乳幼児に関する正常及び逸脱の予測と判断、並びに異常などについても、体系的な項目の整理も行われている。

このように改定されつつ、現在、保健師、助産師の国家試験は午前 75 分、午後 80 分、各 55 問、計 110 問（出題数は 2015 年以降）を用いて、また、看護師の国家試験は午前・午後ともに各 160 分にそれぞれ 120 問ずつ（計 240 問）を用いて、それぞれ行われている。

出題される問題は、主に基礎的な知識を問う「一般問題」と、現場で直面しうる状況を設定し、それに対する理解力・判断力を問う「状況設定問題」から構成されている。なお、問題はブルームのタキソノミー分類を考慮し、想起（Ⅰ）、推定（Ⅰ'）、解釈（Ⅱ）、問題解決（Ⅲ）のそれぞれの分類から作成されている。

2—— 調査・分析の内容および方法

1 | 調査・分析の対象

公表されている国家試験問題から、保健師国家試験については過去 10 年間（2010 年～2019 年実施分）について、助産師および看護師国家試験については過去 5 年間（2015 年～2019 年実施分）の問題を対象に調査・分析を行った。

2 | 調査・分析の内容および方法

出題形式：問題の出題形式について「4 肢択一」「5 肢択一」「5 肢択二」「数値」（解答を数字で選択するもの）で、各年の問題のうちの割合を分析した。

問題の種類：問題の種類について「一般問題」と「状況設定問題」にまず分類し、「状況設定問題」については、「単問」「2 連問」「3 連問」に分類し、各年の問題のうちの割合を分析した。看護師の必修問題については、一般問題との区別について公表されていないので、必修問題も一般問題として扱った。

出題形式における問い：「数値」形式以外の出題形式の問題の問いについて、「正しい」かどうかを問う問題、「適切」かどうかを問う問題、優先度について「優先度（有用性）高い」を問う問題、反対に「優先度（有用性）低い」を問う問題の 4 分類として分析した。

評価領域分類：過去の保健師国家試験問題についてのみ研究者間で評価領域分類（Taxonomy）を問題ごとに検討した。合意形成が得られた評価領域分類（Taxonomy）について、年ごとにその割合を分析した。

文字数測定：一般問題（看護師国家試験は必修問題を含む）、状況設定問題について、それぞれ文字数を測定し、各職種の問題ごとの総文字数を集計・分析した。なお、文字数の測定にあたり、問題文中の表は表中の文字数をカウント、グラフ・図・視覚教材は原則として 1 点 150 字換算とした。ただし選択肢がすべて図や視覚素材である場合は、1 肢 1 点 50 字換算（4 肢択一の場合は計 200 字）とした。

グラフ・図・表の点数：グラフ・図・表については、文字数に換算するだけでなく、各年の問題につき何点掲載されたか、別刷の有無を測定した。

以上について、職種ごとに調査・分析したうえで、3 職種を比較し検討した。但し、評価領域分類（Taxonomy）の調査・分析は保健師国家試験問題の過去 6 年分を対象に行ったため、職種間の比較は行わなかった。

3— 調査・分析の結果

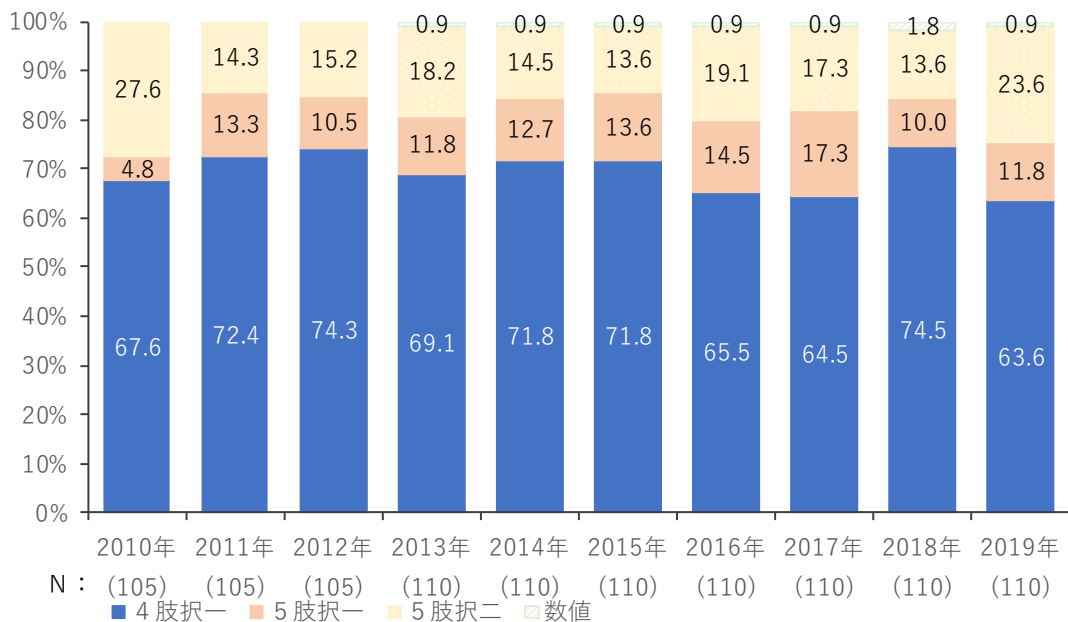
1 | 出題形式の推移

(1) 出題形式

① 保健師

過去 10 年分の保健師国家試験の問題における出題形式についてみると、各年とも「4 肢択一」が 6 割超を占めて最も多く、次いで「5 肢択二」、「5 肢択一」の順となっている。「数値」は 2013 年以降毎年出題されているものの、2 問提示された 2018 年を除く各年とも 1 問とごくわずかとなっている。経年で比較しても特に一貫した増加・減少の傾向はみられないものの、2019 年には「5 肢択二」が 23.6%と 2018 年 (13.6%) を 10 ポイント上回って高く、「4 肢択一」が 63.6%と 2018 年 (74.5%) を 10 ポイント以上下回って低くなっている。

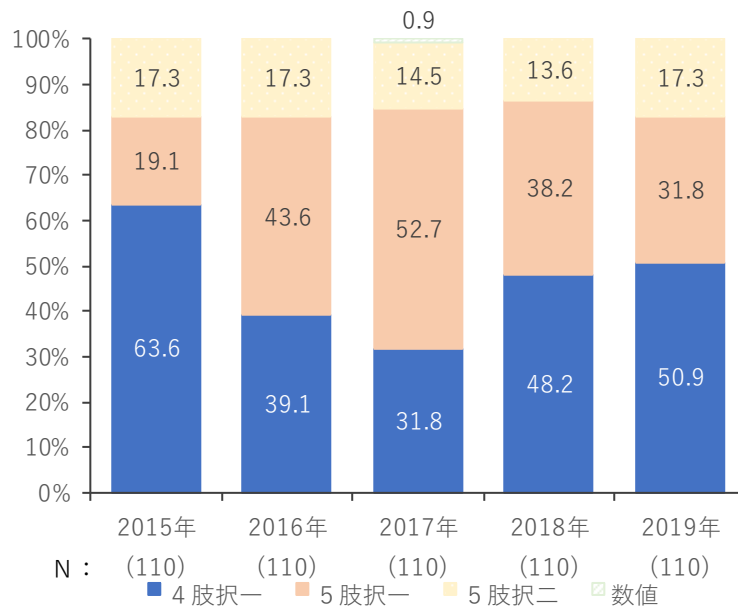
図表 1 出題形式 (保健師)



② 助産師

助産師国家試験の問題における出題形式についてみると、2019年では「4肢択一」が50.9%と半数を超えて最も多く、「5肢択一」(31.8%)、「5肢択二」(17.3%)の順となっている。経年での比較では、「4肢択一」は2017年(31.8%)を底に増加傾向にあり、逆に「5肢択一」が減少している。

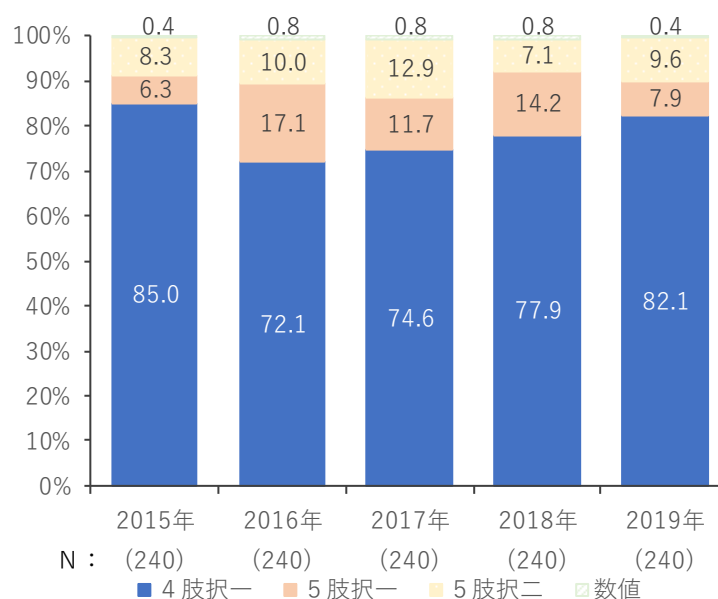
図表 2 出題形式 (助産師)



③ 看護師

看護師国家試験の問題における出題形式についてみると、2019年では「4肢択一」82.1%と大半を占めて多く、次いで「5肢択二」(9.6%)、「5肢択一」(7.9%)、「数値」(0.4%)の順が続いている。経年での比較では、各年とも「4肢択一」が最も多くなっているものの2016年(72.1%)を底に一貫して増加しており、逆に「5肢択一」が減少傾向を示している。

図表 3 出題形式 (看護師)



④ 職種間の比較

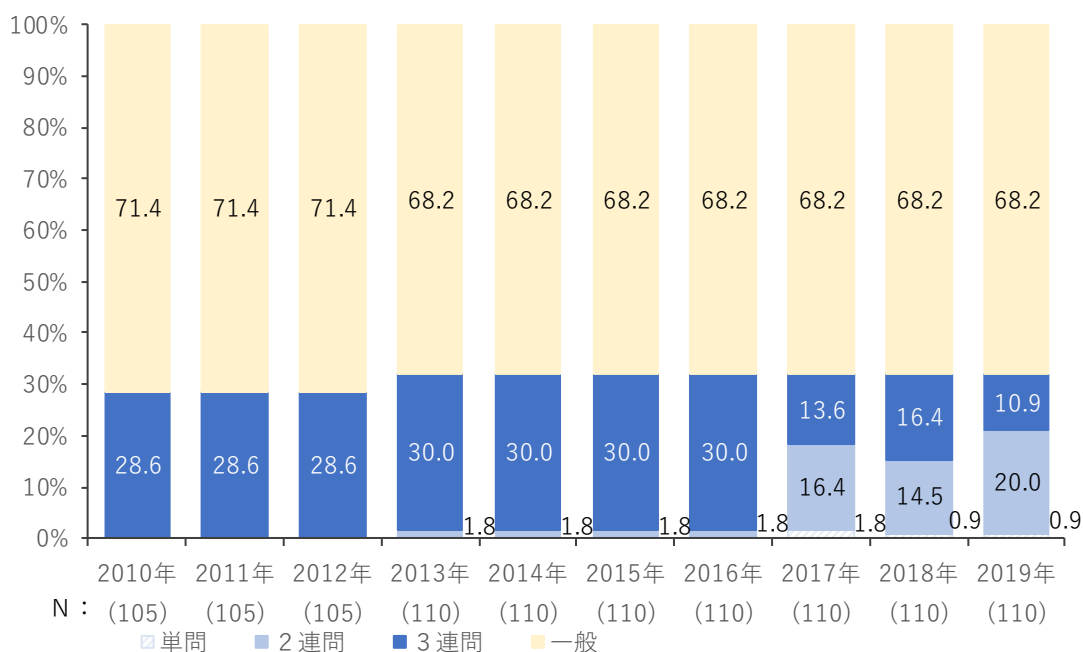
3職種間で比較すると、保健師、看護師では「4肢択一」が一貫して最も多くなっているのに対し、助産師では半数を超えるのは2015年と2019年の2回のみとなっていた。ただし経年での傾向では助産師では2017年から、看護師では2016年から、それぞれ一貫して増加傾向にあった。また、保健師、看護師では「5肢択一」は一貫して2割に満たないのに対し、助産師では2016年以降は一貫して3割を超えて多くなっているほか、保健師では2013年以降、看護師では過去5年間すべてで少ないながら出題されている「数値」は助産師では過去5年間の中で2018年に1問出題されるのみであるなど、職種により出題形式や経年での傾向には差があった。

(2) 問題の種類

① 保健師

過去10年分の保健師国家試験の問題における問題の種類についてみると、2019年では「一般」が68.2%、『状況設定』が31.8%と「一般」が7割近くを占めていた。『状況設定』のなかでは「2連問」(20.0%)が最も多く、「3連問」(10.9%)、「単問」(0.9%)の順となっていた。経年でみても、「一般」と『状況設定』の割合に大きな差異はみられないものの、2017年以降は『状況設定』のうち「2連問」の出題数の増加を受けて1割前後まで減少していた。

図表4 問題の種類（保健師）

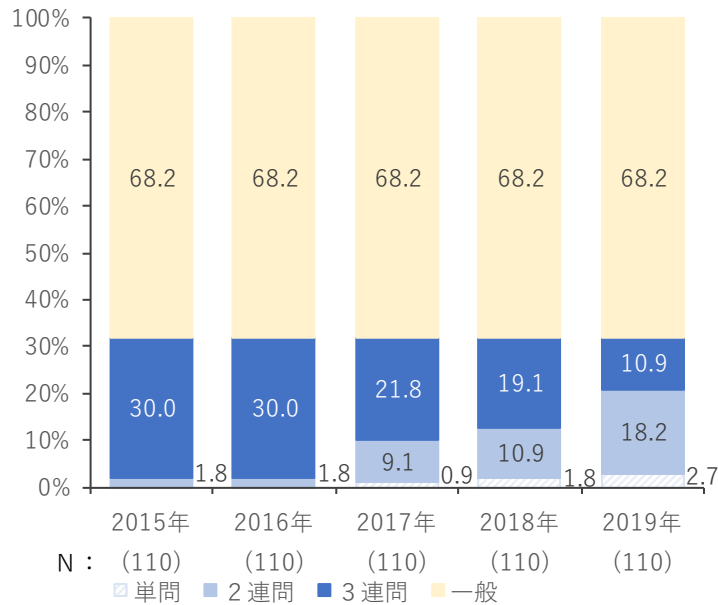


② 助産師

過去5年分の助産師国家試験の問題における問題の種類についてみると、2019年では「一般」が68.2%と約7割を占めており、『状況設定』は31.8%となっていた。経年で比較しても「一般」と『状況設定』の設問数、比率は一定で変化はなかった。

一方『状況設定』のなかでは、2017年以降「2連問」の増加傾向が続いており、2019年には「2連問」が18.2%、「3連問」が10.9%と構成比が逆転する状況となっていた。

図表 5 問題の種類（助産師）

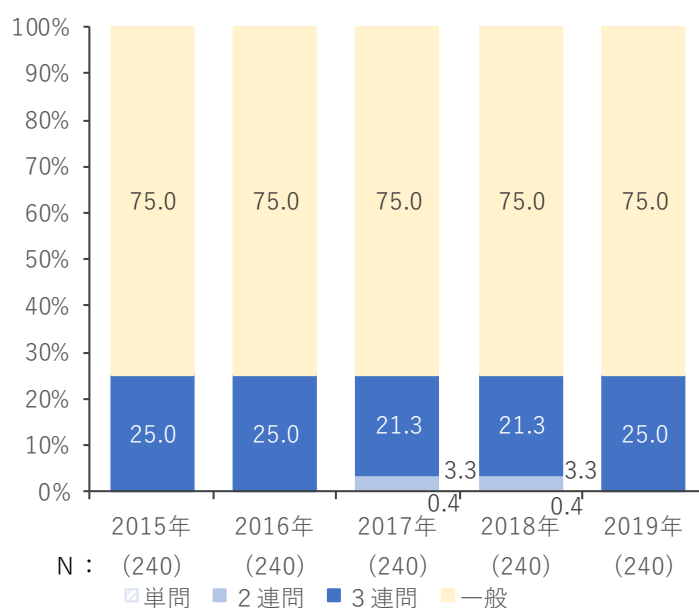


③ 看護師

過去5年分の看護師国家試験の問題における問題の種類についてみると、2019年では「一般」が75.0%と4分の3を占めて多く、『状況設定』は25.0%となっていた。経年で比較しても「一般」と『状況設定』の設問数、比率は一定で変化がみられなかった。

『状況設定』の内訳についてみても、2017年、2018年には「単問」「2連問」が数問出題されているものの、2019年にはすべて「3連問」に戻っていた。

図表 6 問題の種類（看護師）



④ 職種間の比較

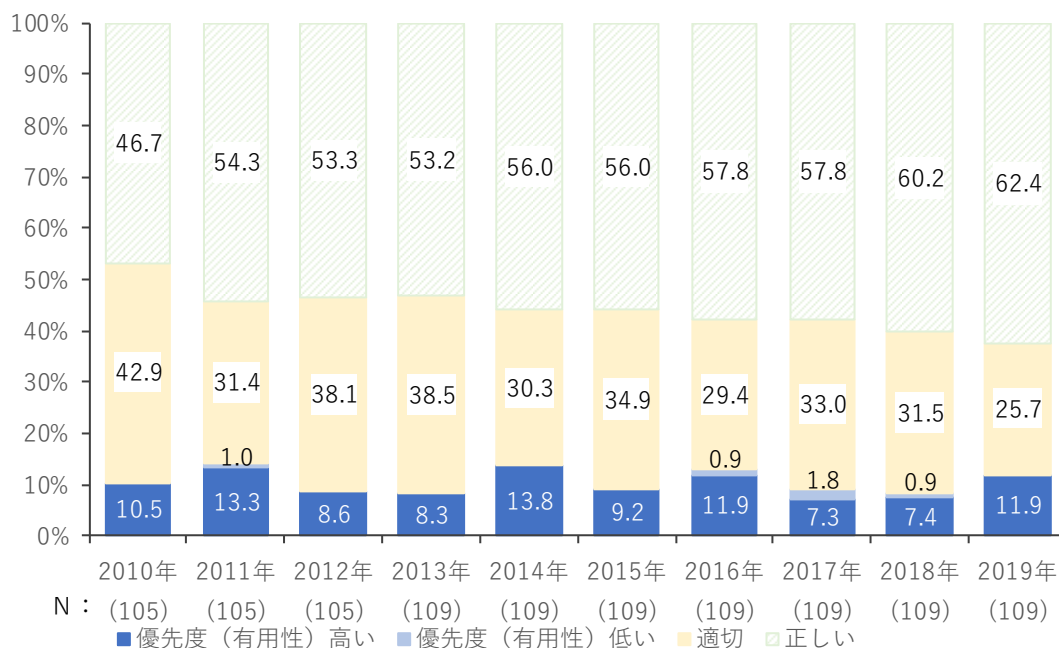
3職種間で比較すると、いずれの職種についても「一般」が最も多くなっているものの、その構成比には差があり、看護師が4分の3と最も多く、保健師、助産師が約7割となっていた。『状況設定』の内訳では、2019年には保健師、助産師で「2連問」が増加する傾向があったのに対し、看護師ではほぼ一貫して「3連問」のみとなっていた。

(3) 数値回答以外の出題形式における問い

① 保健師

過去10年分の保健師国家試験の問題における数値回答以外の出題形式における問いについてみると、2019年には「正しい」が62.4%で最も多く、「適切」(25.7%)、「優先度(有用性)高い」(11.9%)の順となっていた。経年での比較では、2010年には半数に満たなかった「正しい」(46.7%)は概ね増加傾向にある一方で2010年には42.9%と4割を占めていた「適切」が2019年には3割を下回るまで減少していた。

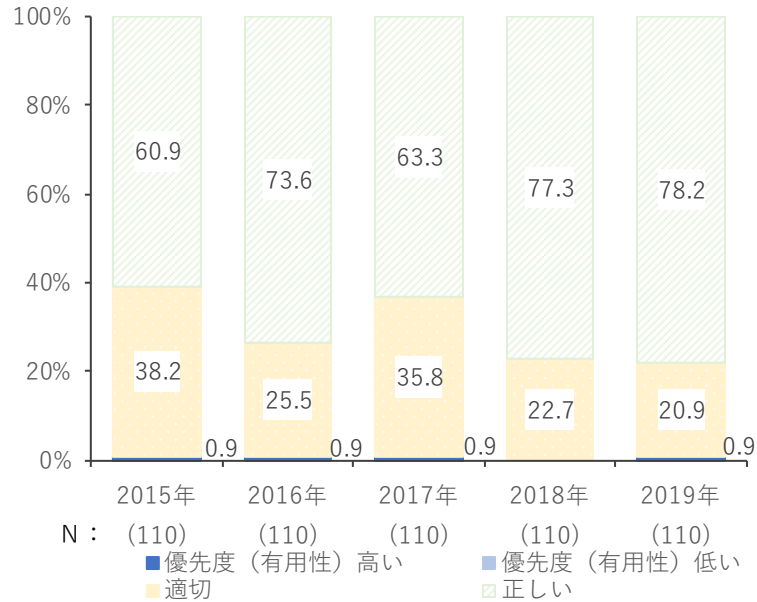
図表7 数値解答以外の出題形式における問い(保健師)



② 助産師

過去5年分の助産師国家試験の問題における数値回答以外の出題形式における問いについてみると、2019年では「正しい」が78.2%と8割近くを占めて最も多く、「適切」(20.9%)、「優先度(有用性)高い」(0.9%)の順であった。経年での比較では、2017年には6割台であった「正しい」(63.3%)が増加し、同年には3割台であった「適切」(35.8%)が減少していた。

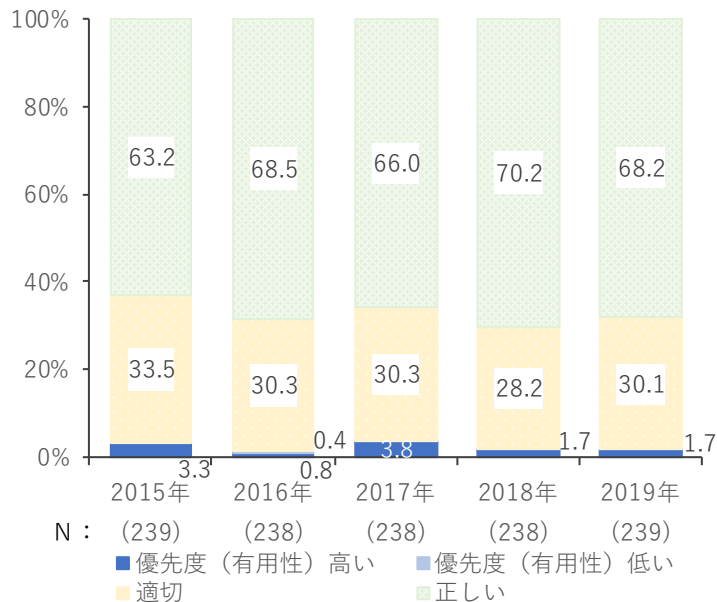
図表 8 数値解答以外の出題形式における問い (助産師)



③ 看護師

過去5年分の看護師国家試験の問題における数値回答以外の出題形式における問いについてみると、2019年では「正しい」が68.2%と7割近くを占めて最も多く、「適切」(30.1%)、「優先度(有用性)高い」(1.7%)の順となっていた。経年でみても特定の傾向はみられず、構成比ではほぼ横ばいの状態となっていた。

図表 9 数値解答以外の出題形式における問い (看護師)



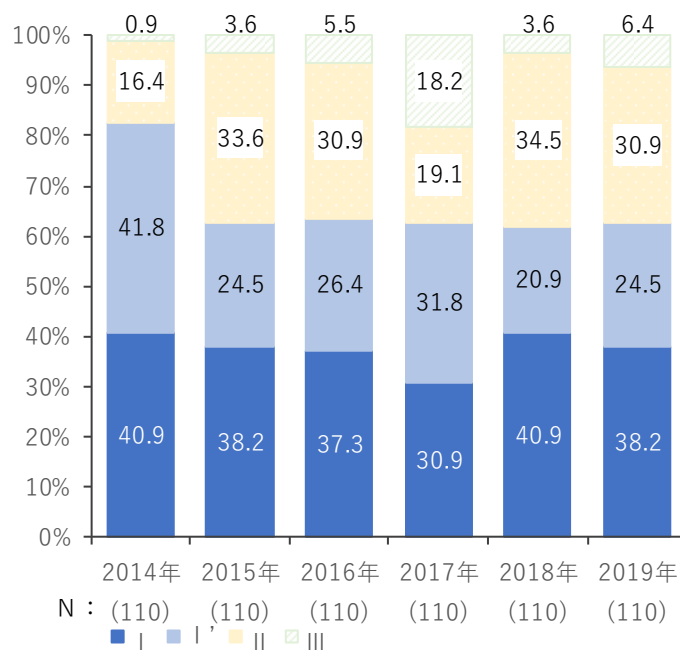
④ 職種間の比較

3職種間で比較すると、いずれの職種においても「正しい」が最も多くなっているものの、保健師、助産師では増加傾向にあるのに対し、看護師では横ばいとなっており、経年での傾向には差がみられていた。また、保健師では各年とも1割前後を占める優先度を問う問題(「優先度(有用性)高い」または「優先度(有用性)低い」)は助産師、看護師ではほとんど出題されていなかった。

(4) 評価領域分類 (Taxonomy)

過去6年間の保健師国家試験の問題における評価領域分類 (Taxonomy) についてみると、2019年では「I」が38.2%で最も多く、次いで「II」が30.9%、「I'」が24.5%、「III」が6.4%の順となっていた。経年での比較では、特に一定の傾向はみられないものの、2015年以降は一貫して「I」と「I'」が6割程度を占めていた。

図表 10 評価領域分類 (Taxonomy)



2 | 文字数の推移

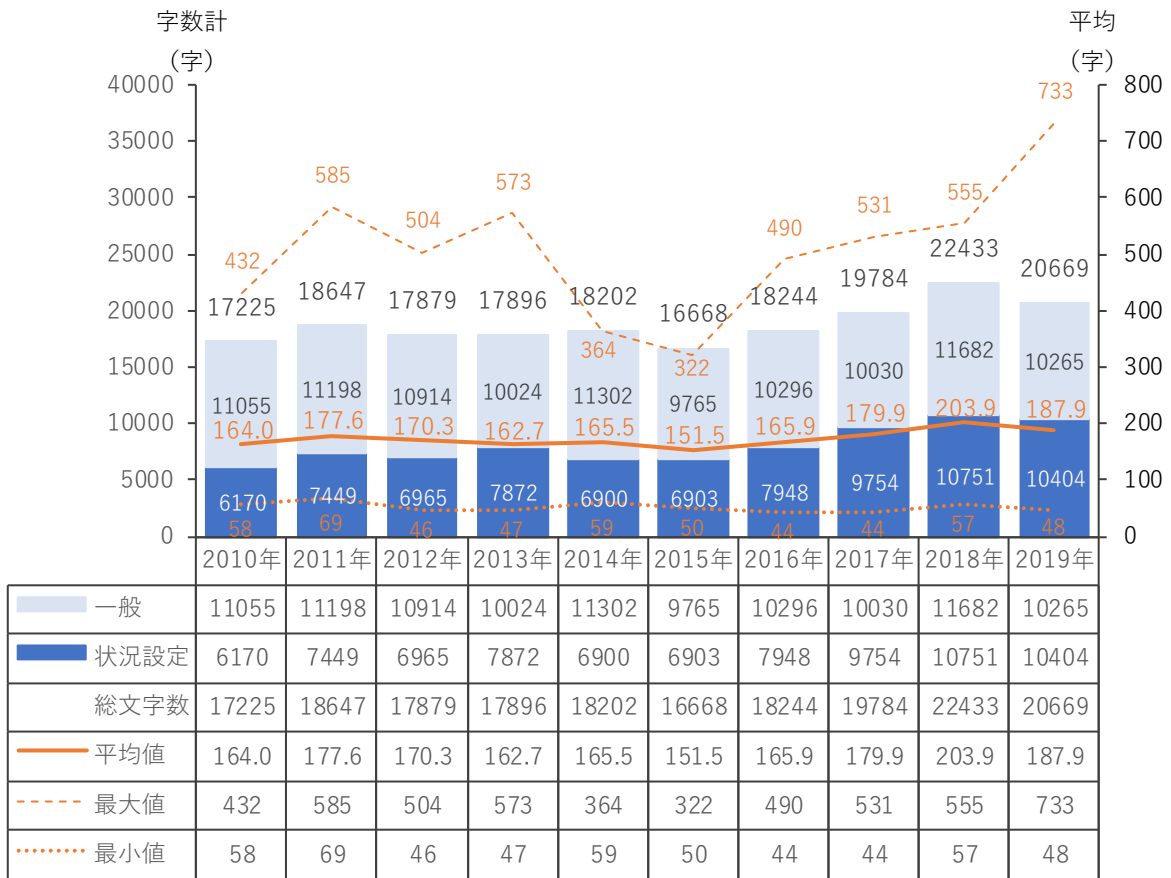
(1) 総文字数

① 保健師

過去 10 年分の保健師国家試験の問題文の総文字数は、2015 年の 16,668 字を底として増加傾向を示しており、2018 年には 22,433 字と 2015 年に比べ 5,765 字増えて 2 万字を超えていた。

問題ごとの平均値でみると、150~200 字程度とほぼ横ばいの状態にあるものの、総文字数と同様、2018 年には 203.9 文字と 2015 年 (151.5 字) に比べ 52.4 字増加していた。問題ごとの文字数の幅をみても最大値と最小値の差は 2015 年では 272 字であったものが、2019 年には 685 字となっており、問題ごとの文字数のバラツキが増える傾向が認められた。

図表 11 問題文の総文字数 (保健師)

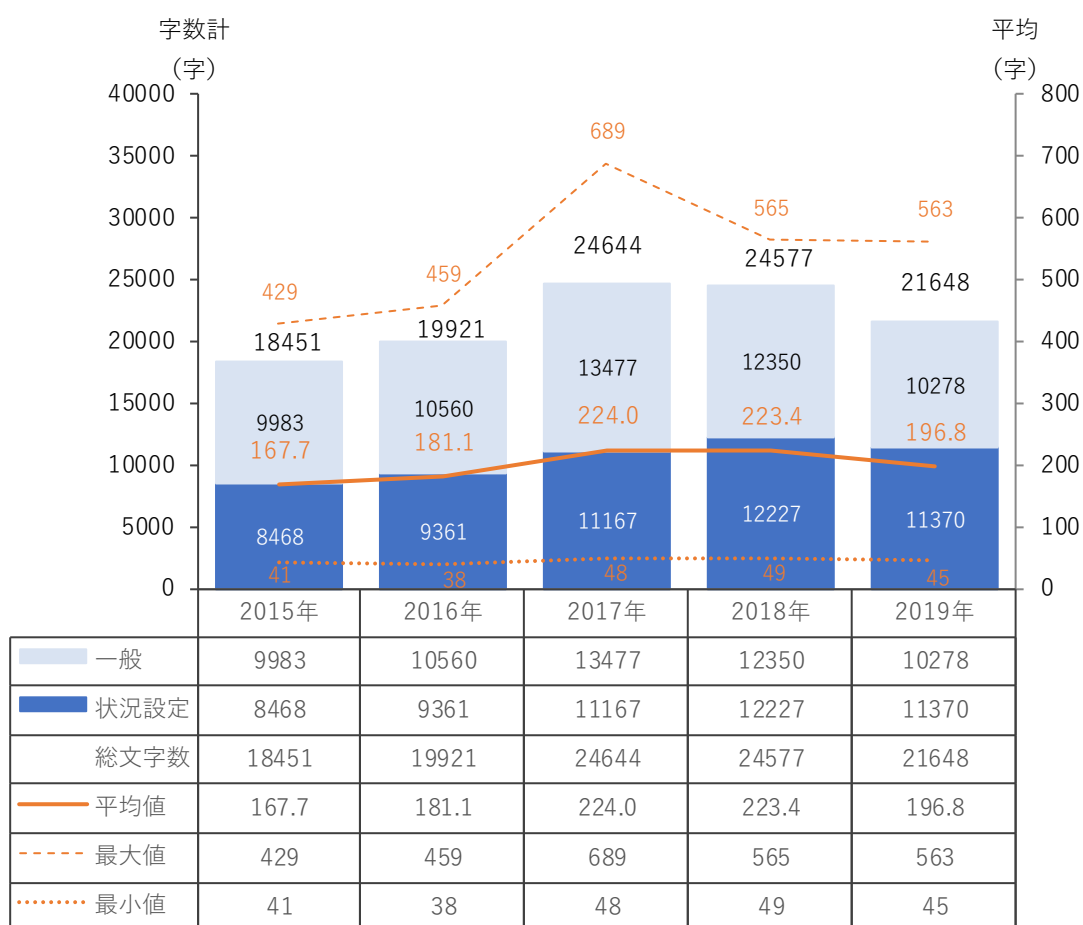


① 助産師

過去5年分の助産師国家試験の問題文の総文字数は、2015年の18,451字から2017年には24,644字と2015年に比べ6,193字増加していた。2017年以降は減少に転じているものの、2019年時点でも21,648字と2万字を超えていた。

問題ごとの平均値でも同様に、2015年から2017年にかけて増加しており、2017年には224.0字と2015年(167.1字)に比べ56.3字増加していた。問題ごとの文字数の幅をみても、最大値と最小値の差は2016年までは500字未満であったものが、2017年には641字まで広がっていたほか、2018年以降も500字以上の差が続いている。

図表 12 問題文の総文字数(助産師)

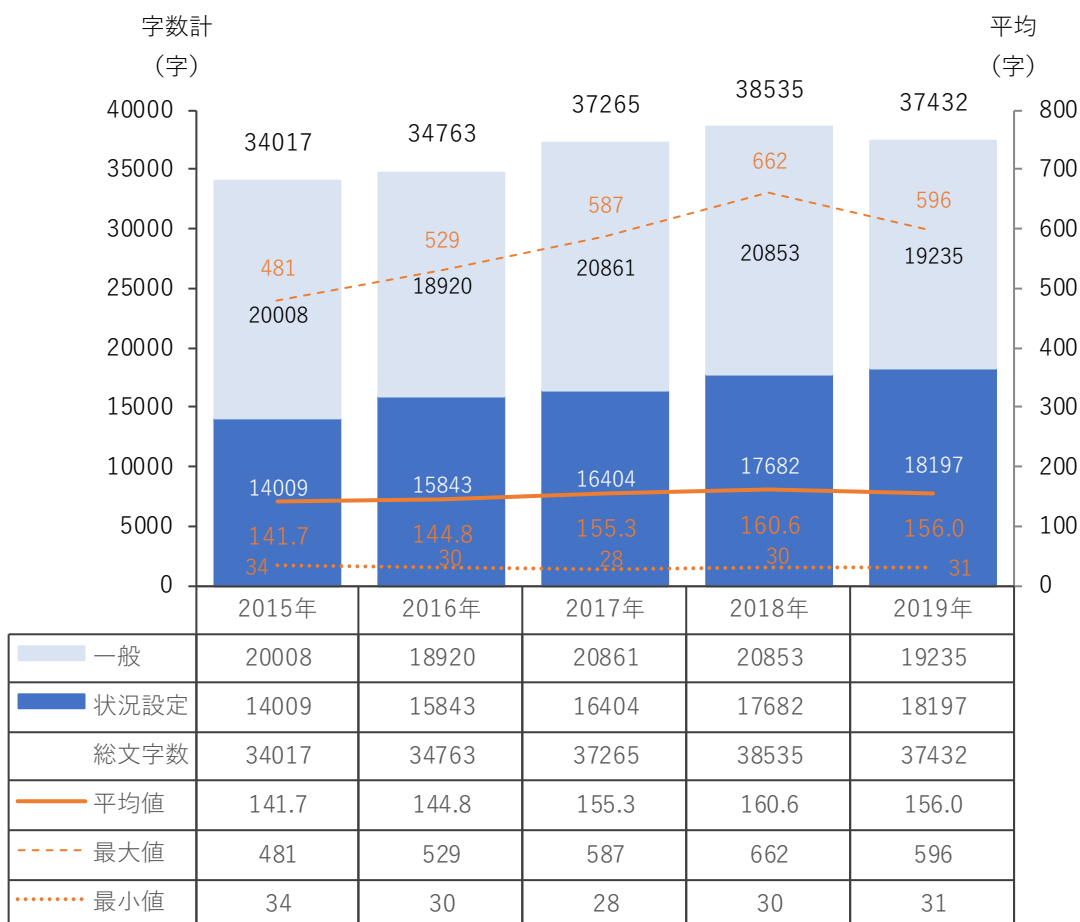


② 看護師

過去5年分の看護師国家試験の問題文の総文字数は、2015年の34,017字から2018年には38,535字と2015年に比べ4,518字増加していた。2019年には37,432字と2018年から1,103字減少しているものの、2016年以前との対比では2千字以上多くなっていた。

問題ごとの平均値でみると、2018年には160.6字と2015年（141.7字）に比べ僅かながら増加しているものの増加の幅は18.8字と20字に満たなかった。一方で問題ごとの文字数の幅をみると、最大値と最小値の差は2015年時点では447字と500字に満たなかったものが、2018年には632字まで広がっていた。

図表 13 問題文の総文字数（看護師）



③ 職種間の比較

3職種間で比較すると、総文字数は2015年以降、3職種ともに概ね増加傾向にあり、助産師では2017年にかけて、保健師、看護師では2018年にかけて、それぞれ一貫して増加していた。問題ごとの平均値でも同様に増加傾向にはあるものの、保健師、助産師がいずれも2015年対比で50字以上増加しているのに対し、看護師では20字未満に留まるなど、増加の傾向には職種間で差がみられていた。

一方、問題ごとの文字数の幅では、3職種ともに最大値と最小値の差は概ね拡大する傾向にあることから、問題により文字数のバラツキが増す傾向が認められた。

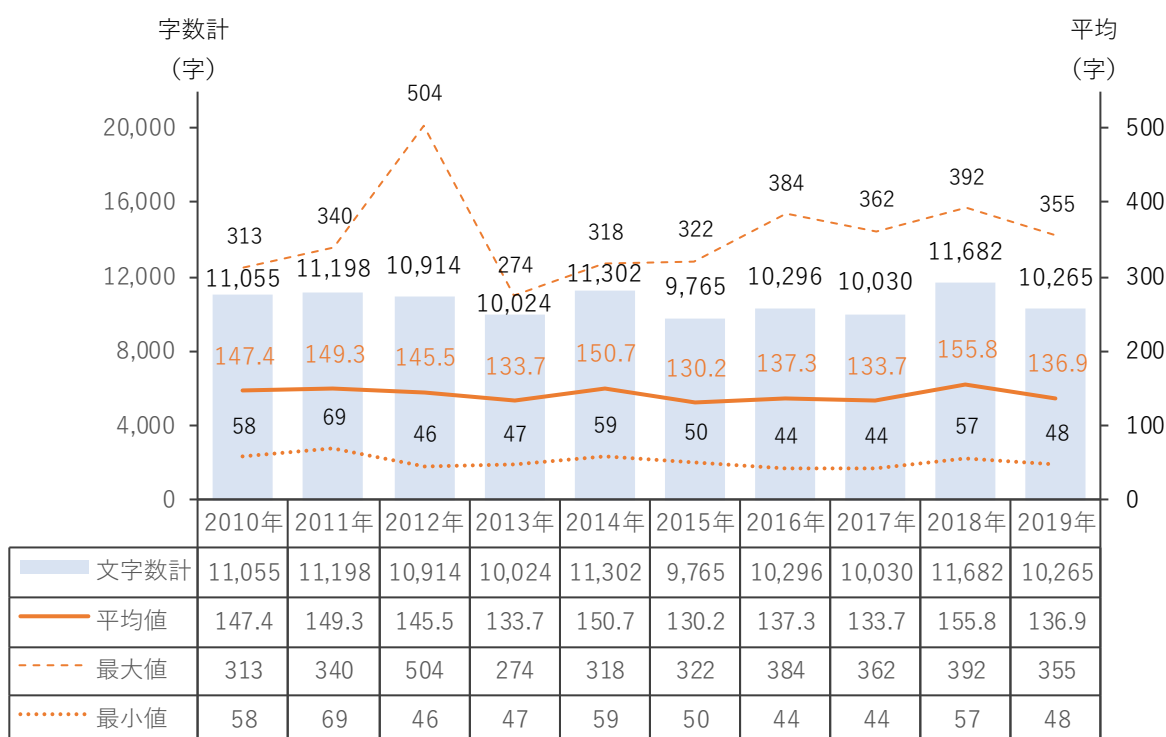
(2) 一般問題の文字数

① 保健師

一般問題の文字数についてみると、過去10年分の保健師国家試験の問題文の文字数は、2015年の9,765字であったものが2018年には11,682字と1,917字増加していた。ただし2019年には10,265字と1,417字減少するなど、経年では増加減少を繰り返しており、一貫した傾向は読み取れなかった。

問題ごとの平均値でも同様に、2018年には155.8字と2015年(130.2字)に比べ多くなっているものの、その差は25.6字と僅かな差に留まっていた。問題ごとの文字数の幅をみると、最大値と最小値の差は2012年には458字と大きくなっているものの他の年では200~300字程度であり、一貫した拡大・縮小の傾向は認められなかった。

図表 14 一般問題の問題文の文字数(保健師)

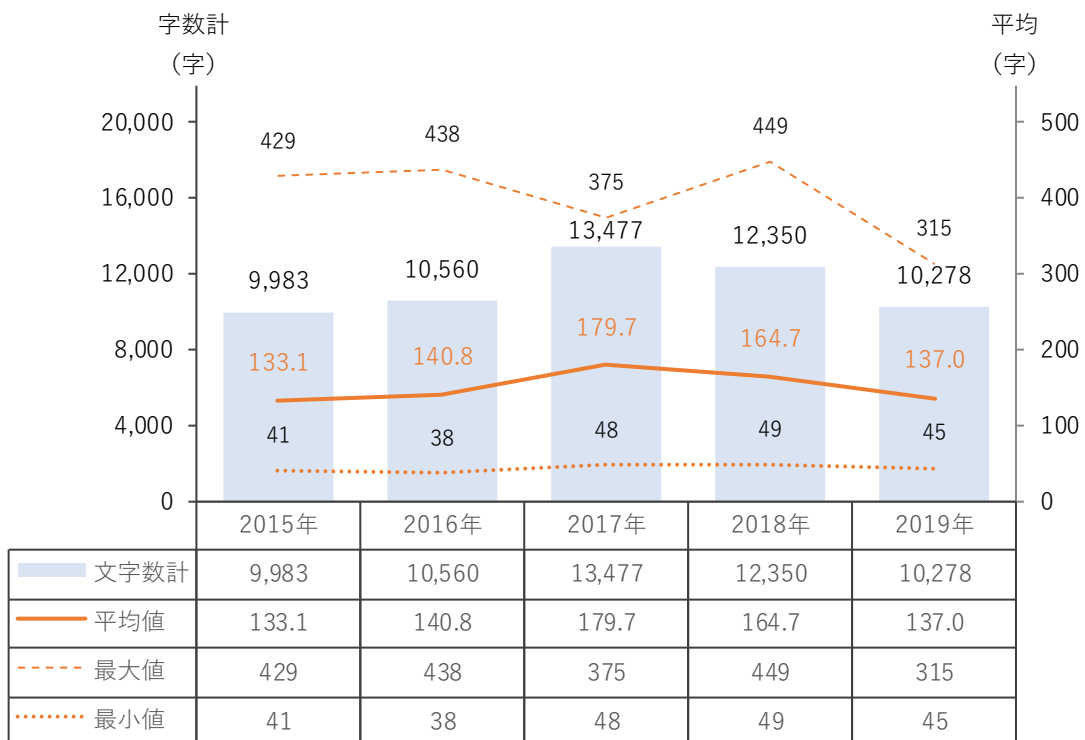


② 助産師

過去5年分の助産師国家試験の一般問題の文字数は、2015年の9,983字から2017年には13,477字と2015年に比べ3,494字増加していた。ただし2017年以降は減少に転じており、2019年に10,278字と2017年に比べ3,199字減少し、2015年に次いで少なくなっていた。

問題ごとの平均値でも同様に、2017年には179.7字と2015年（133.1字）に比べ多くなっているものの、2019年には137.0字に減少していた。問題ごとの文字数の幅をみると、最大値と最小値の差は2016年、2018年にそれぞれ400字と開いているものの、その他の年では200～300字程度であり、一貫した拡大・縮小の傾向にはなかった。

図表 15 一般問題の問題文の文字数（助産師）

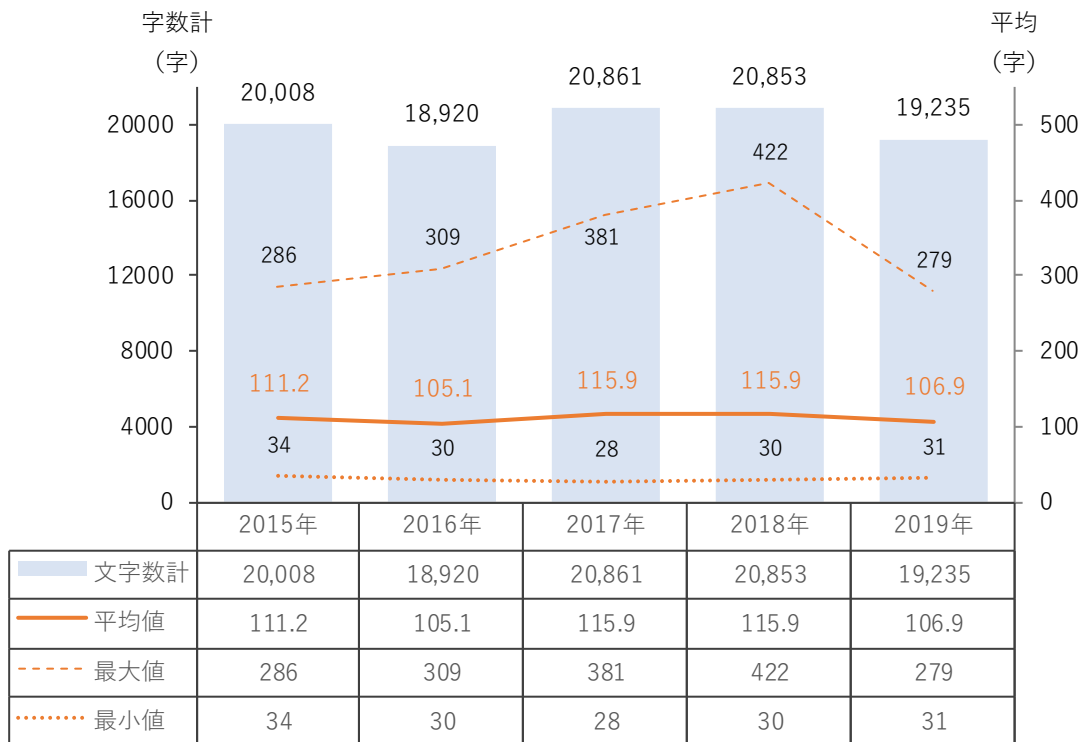


③ 看護師

過去5年分の看護師国家試験の一般問題の文字数は、2016年の18,920字から2017年には20,861字と2016年に比べ1,941字増加していた。2018年から2019年にかけては1,618字減少していたもののその減少幅は1割にも満たなかった。

問題ごとの平均値で見ると2015年以降は100~120字程度の横ばいで推移しており、一貫した拡大・縮小の傾向は見受けられなかった。また、問題ごとの文字数の幅では、最大値と最小値の差は2015年には252字であったものが2018年には392字まで広がっていたものの、2019年には248字と2015年と同水準まで縮小していた。

図表 16 一般問題の問題文の文字数（看護師）



④ 職種間の比較

3職種間で比較しても、一般問題の文字数は全体、平均値のいずれについても3職種ともに一貫した傾向は認められなかった。問題ごとの文字数の幅としてみても同様に一貫した傾向があるとはいえない状況であった。

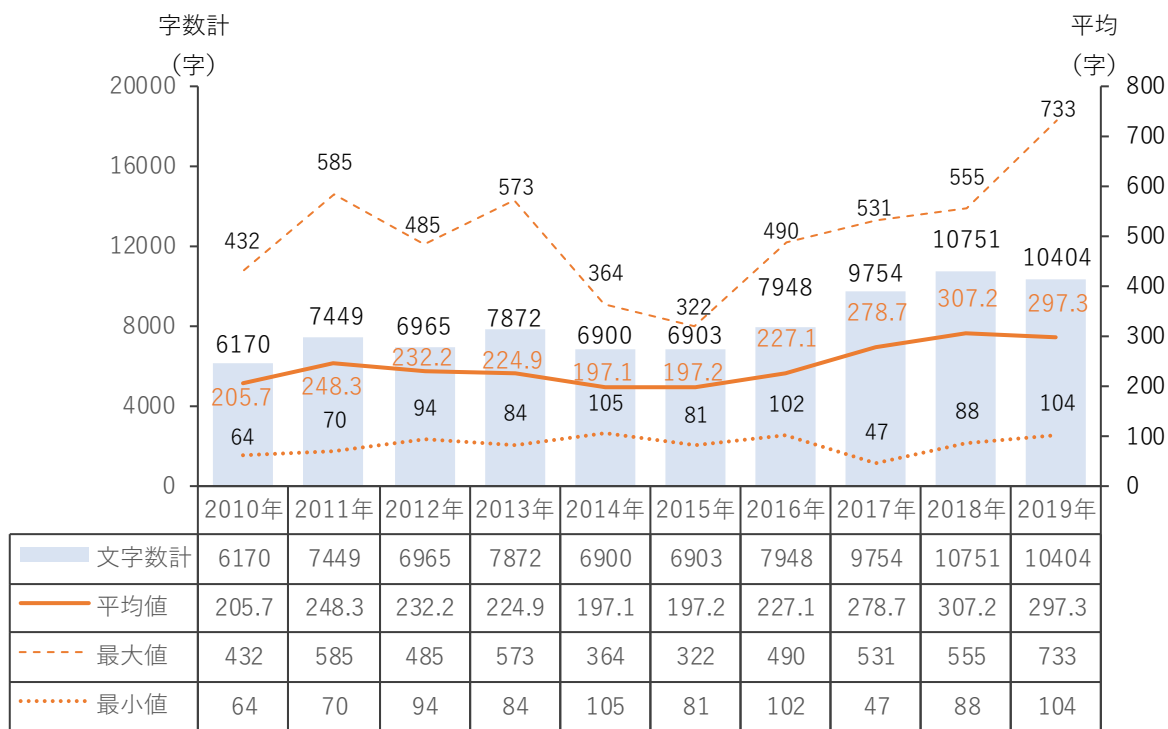
(3) 状況設定文の文字数

① 保健師

過去 10 年分の保健師国家試験の状況設定問題における状況設定文の文字数についてみると、2018 年が 10,751 字で最も多く、2018 年から 2019 年 (10,404 字) にかけては僅かながら減少しているものの、2010 年の 6,170 字を底として概ね増加傾向が続いていた。

問題ごとの平均値でも同様に 2014 年の 197.1 字を底として増加しており、2018 年には 307.2 字と最も多くなっていた。問題文ごとの文字数の幅では、最大値と最小値の差は 2015 年の 241 字を底として拡大傾向にあり、2019 年には 629 字と大きくなっていた。

図表 17 状況設定文の文字数 (保健師)

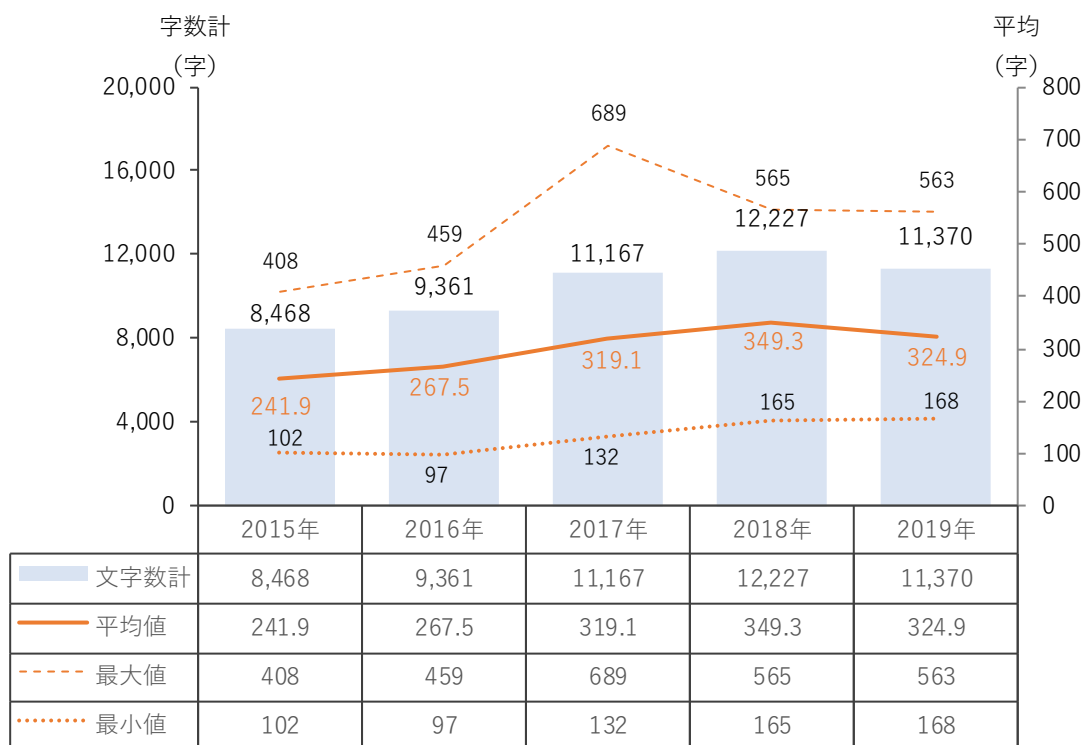


② 助産師

過去5年分の助産師国家試験の状況設定文の文字数は、2015年の8,468字を底として概ね一貫して増加しており、2018年には12,227字と2015年に比べ3,759字増加していた。

問題ごとの平均値としてみても同様に一貫した増加傾向が続いており、2018年には349.3字と最少であった2015年(241.9字)から107.4字増加して最も多くなっていた。また、問題ごとの文字数の幅としてみると、最大値と最小値の差は2015年では306字であったものが2017年には557字と拡大しており、2018年以降も400字前後の差となっていた。

図表 18 状況設定文の文字数（助産師）

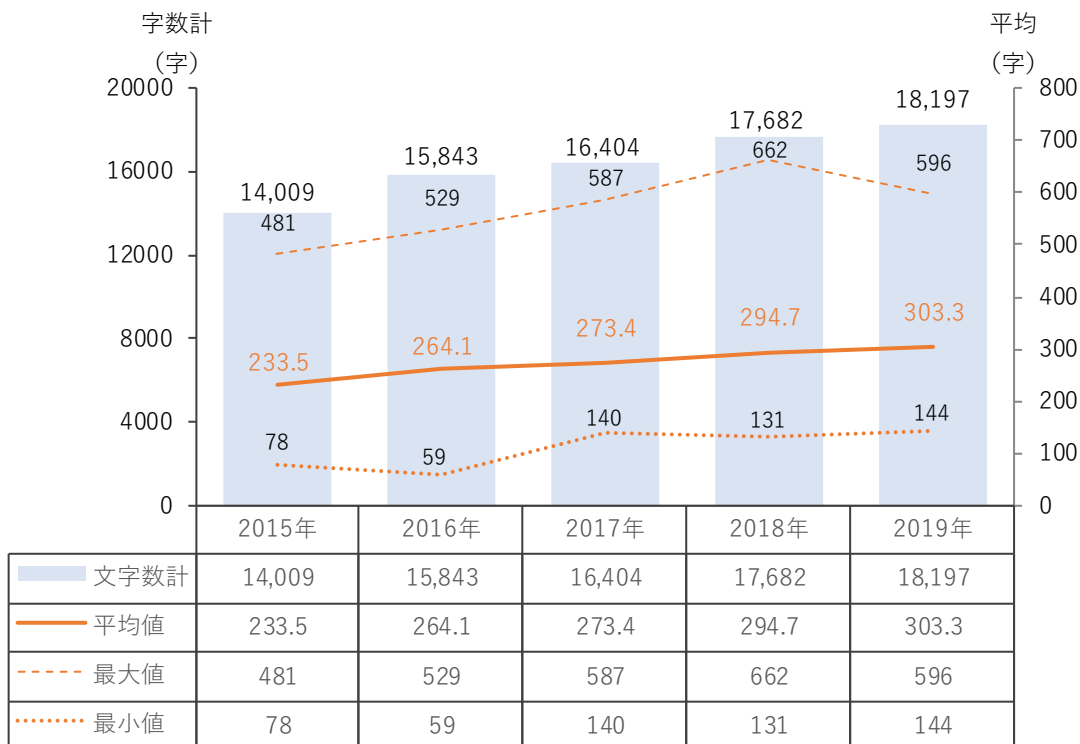


③ 看護師

過去5年分の看護師国家試験の状況設定文の文字数は、2015年の14,009字を底として一貫して増加しており、2019年には18,197字と4,188字増加していた。

問題ごとの平均値としてみても同様に一貫して増加しており、2019年には303.3字と最少であった2015年(233.5字)から69.8字増加していた。問題ごとの文字数の幅としてみても、最大値と最小値の差は概ね拡大傾向にあり、2015年には403字であった最大値と最小値の差は2018年には531字まで拡大するなど問題ごとの文字数のバラツキが大きくなっていった。

図表 19 状況設定文の文字数(看護師)



④ 職種間の比較

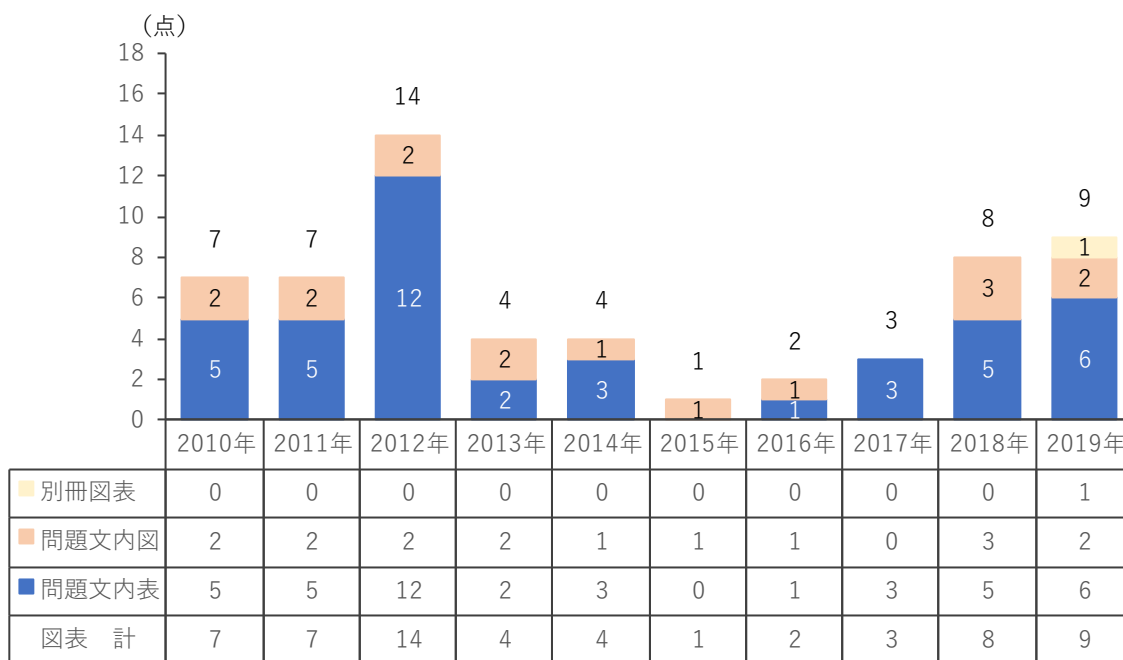
3職種間で比較すると、状況設定問題の文字数は職種に関わらず概ね増加傾向にあり、この5年間では保健師、助産師では2018年、看護師では2019年に最も多くなっていた。問題ごとの平均値としてみても、3職種とも概ね増加傾向にあり、2015年に比べ2019年には保健師で100.0字の増加、助産師で82.9字、看護師で69.8字の増加と、それぞれ増加しているものの増加の幅には職種感でやや差がみられていた。問題ごとの文字数の幅としてみても同様に、最大値と最小値の差は保健師、看護師が概ね拡大傾向にあるのに対し、助産師では2017年から2018年にかけて縮小に転じるになど、職種により異なる傾向がみられた。

(4) 図表点数

① 保健師

過去 10 年分の保健師国家試験の問題における図表の点数についてみると、全体では 2015 年の 1 点を底として増加が続いており、2019 年には 9 点と 2012 年の 14 点に次いで多くなっていた。個々の図表についてみると、各年とも問題文内表が多くを占めており、2015 年以降の増加は問題文内表の増加によるものであった。また、2019 年には全体 9 点のうち問題文内表が 6 点と 3 分の 2 を占める一方、別冊図表 1 点が過去 10 年間で唯一、提示されている。

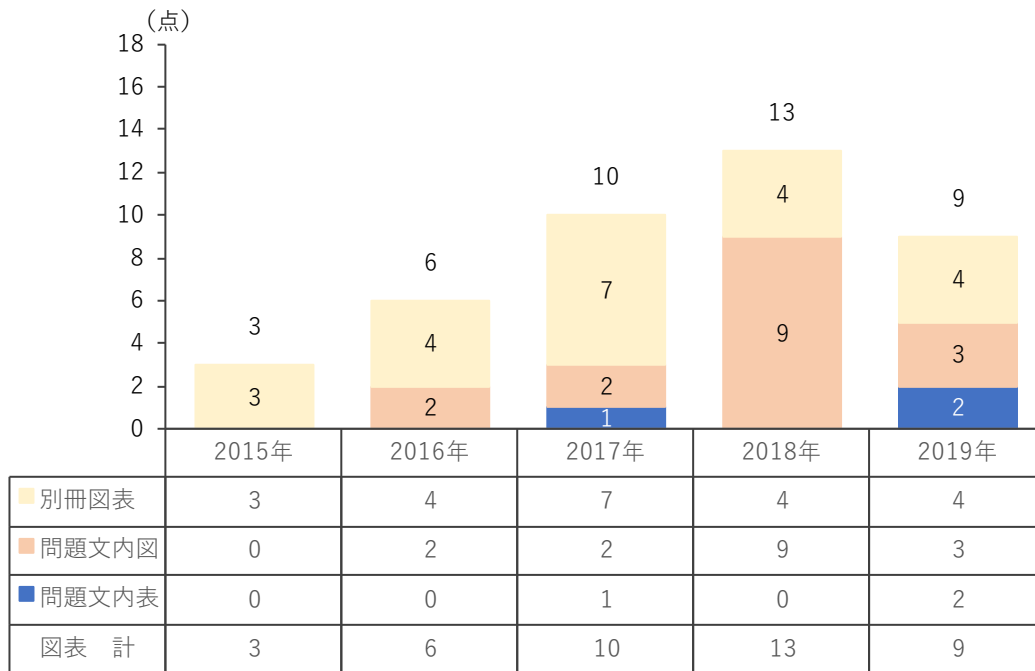
図表 20 図表点数（保健師）



② 助産師

過去5年分の助産師国家試験の問題における図表の点数は2015年の3点を底に増加し、2018年には13点と最も多くなっていった。個々の図表についてみると、点数が最も多い2018年では問題文内図が9点と大半を占めており、別冊図表の方が多い2017年以前とは異なっていた。また、2019年には全体9点のうち別冊図表が4点、問題文内図が3点、問題文内表が2点と過去5年間では最も3種類の均衡がとれた状態となっていた。

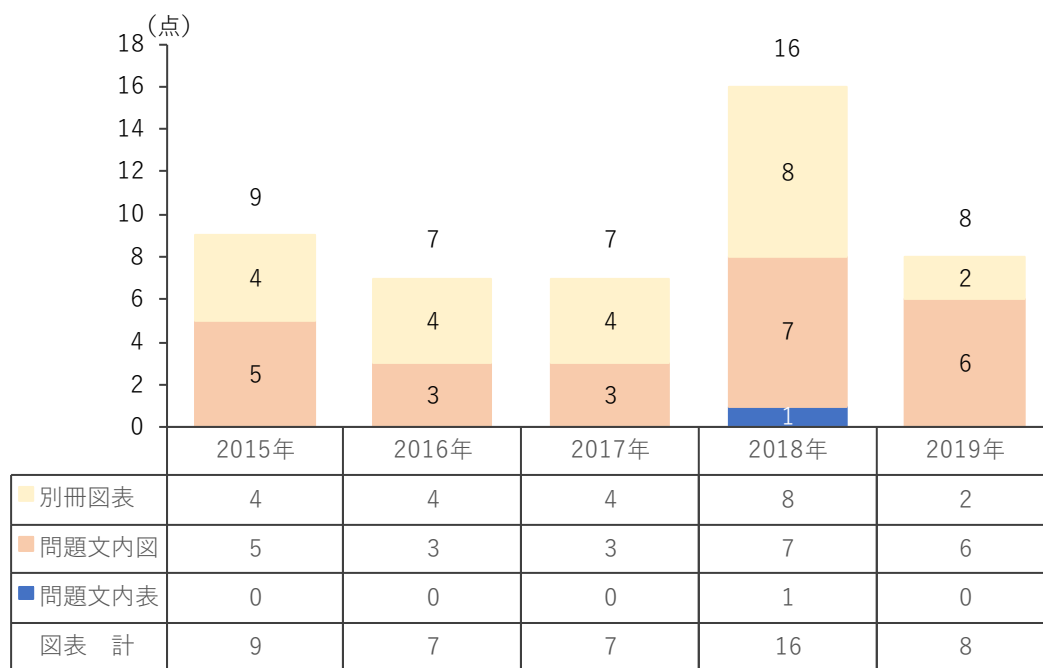
図表 21 図表点数（助産師）



③ 看護師

過去5年分の看護師国家試験の問題における図表の点数は2018年が16点と最も多くなっていた。その他の年では各年ともに7～9点と横ばいの状態であり、一貫した傾向はみられなかった。個々の図表についてみると、問題文内表は2018年の1点のみであり、各年とも問題文内図と別冊図表がほぼすべてを占めていた。なお2019年には全体8点のうち6点と大半を問題文内図が占めていた。

図表 22 図表点数（看護師）



④ 職種間の比較

3職種間で比較すると、各年とも保健師では問題文内表が多くを占めているのに対し、助産師、看護師では問題文内表は5年間のうち掲載されたのは1～2回、それぞれ1～2点に留まり、問題文内図や別冊図表がほとんどを占める状況となっていた。

経年での変化としてみると、保健師では2015年以降一貫して、助産師では2015年から2018年にかけて、それぞれ全体の点数が増加しているのに対し、看護師では2018年を除いてほぼ横ばいの状態となっていた。

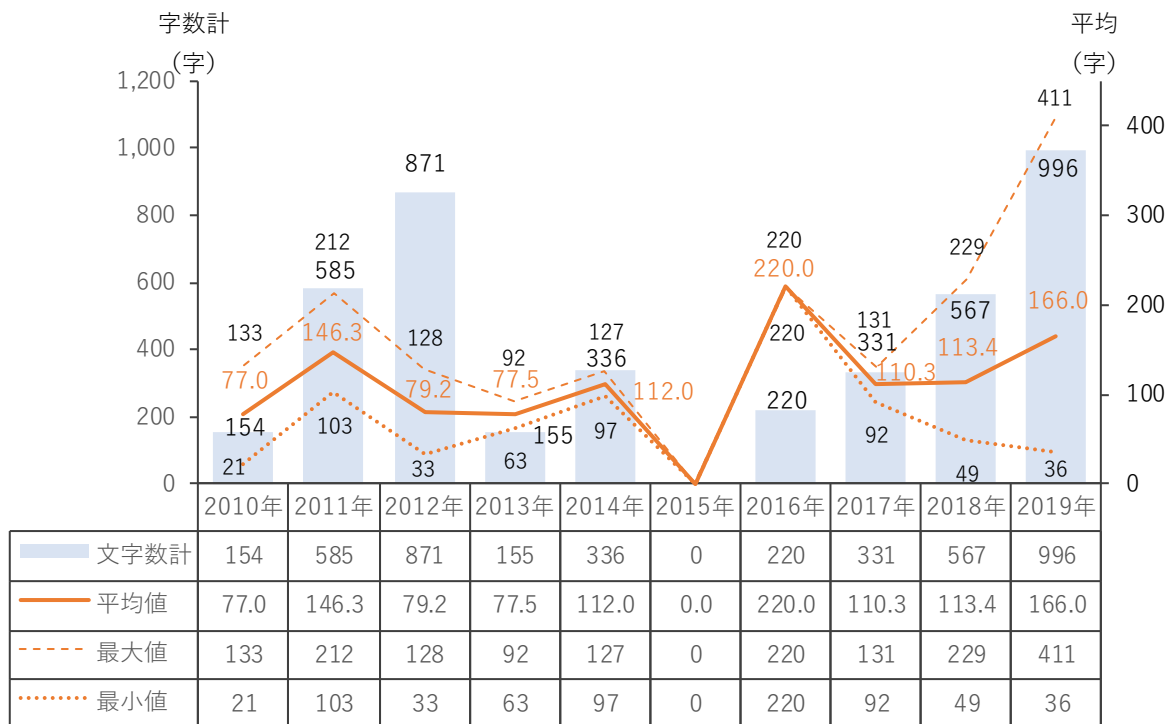
(5) 問題文内の表の文字数

① 保健師

過去 10 年分の保健師国家試験の問題における問題文内の表の文字数についてみると、直近では 2016 年の 220 文字を底に一貫して増加しており、2019 年には 996 文字と過去 10 年間で最も少ない 2010 年（154 字）に比べ 842 字多くなっていた。

これを平均値でもみて 2019 年では 166.0 字と 2016 年に次いで多くなっていた。問題ごとの文字数の幅としてみると、2019 年は最大値と最小値の差が 375 字と突出して最も大きくなっていた。

図表 23 問題文内の表の文字数（保健師）



② 助産師・看護師

過去5年分の助産師国家試験の問題における問題文内の表の文字数についてみると、2019年には236字と2017年(69字)に比べ194字多かった。なお、2点提示された2019年の表あたりの平均は131.5字となっており、1点のみであった2017年に比べ62.5字多くなっていた。

一方、看護師国家試験では唯一1点だけ提示された2018年には136字となっていた。

図表 24 問題文内の表の文字数(助産師・看護師)

(字)

	助産師				看護師			
	平均値	最大値	最小値	文字数計	平均値	最大値	最小値	文字数計
2015年	—	—	—	—	—	—	—	—
2016年	—	—	—	—	—	—	—	—
2017年	69.0	69	69	69	—	—	—	—
2018年	—	—	—	—	136.0	136	136	136
2019年	131.5	158	105	263	—	—	—	—

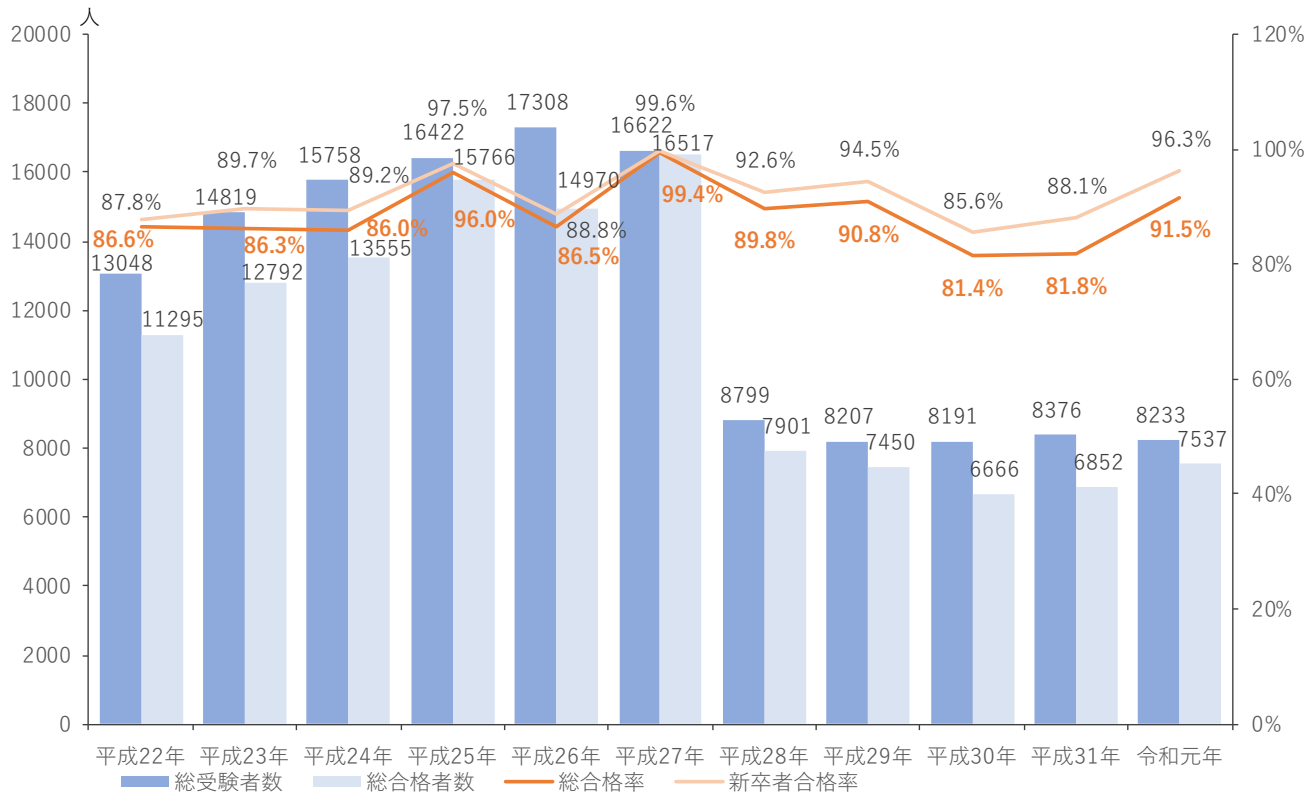
3 | 合格率の推移と文字数との関係

(1) 合格率の推移

① 保健師

保健師国家試験についてみると、受験者数は平成27年から平成28年にかけて急減しているもののその後は横ばいで推移していた。一方、合格率は総合格率、新卒者合格率ともに平成27年(99.4%、99.6%)に最も高く、その後は低下したものの平成30年を底に上昇に転じており、令和元年では総合格率が91.6%、新卒者合格率が96.3%となっていた。

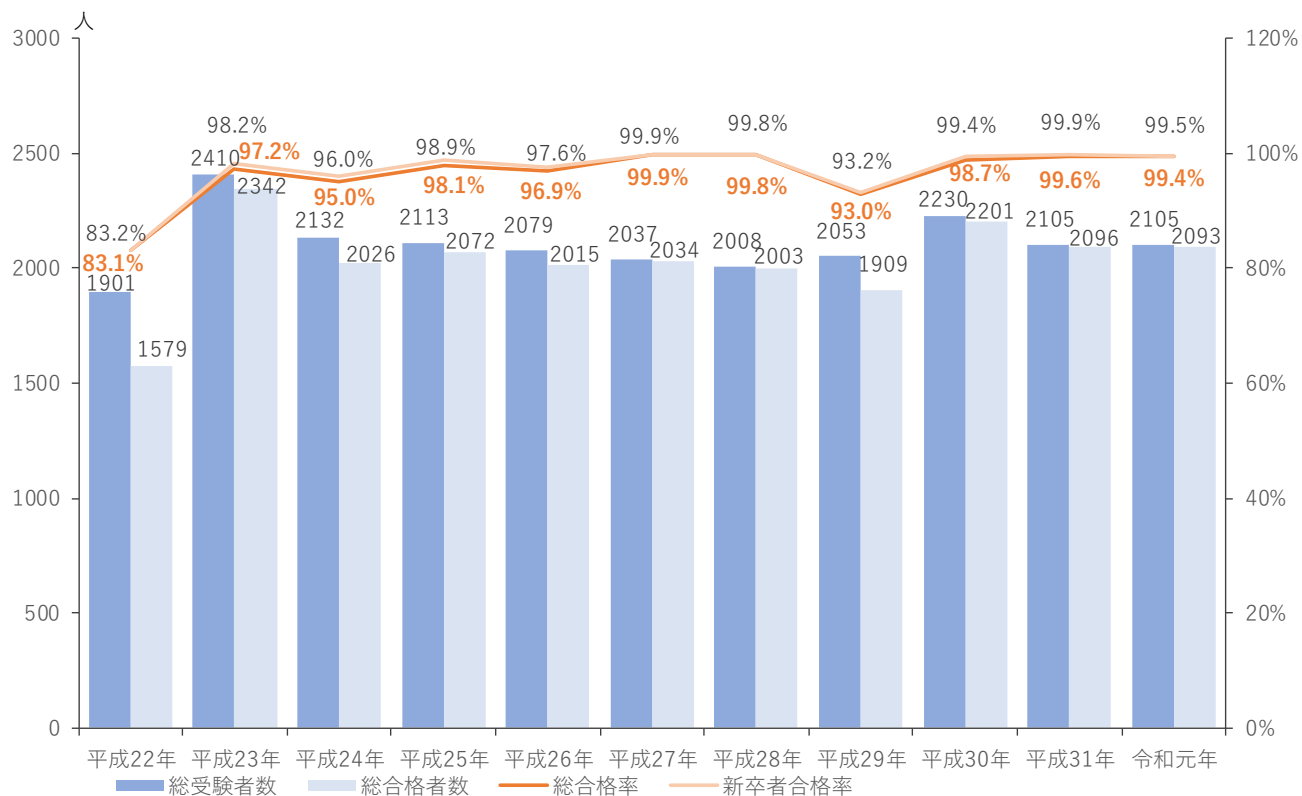
図表 25 保健師国家試験合格状況



① 助産師

助産師国家試験についてみると、受験者数は平成23年には約2,410人、平成30年には2,230人と多くなっているものの、概ね2,000人前後となっていた。合格率についても同様に、総合合格率、新卒者合格率とも平成27年（いずれも99.9%）に最も高く、平成29年（いずれも93.0%）を除いて90%台後半と高い水準の横ばいで推移していた。

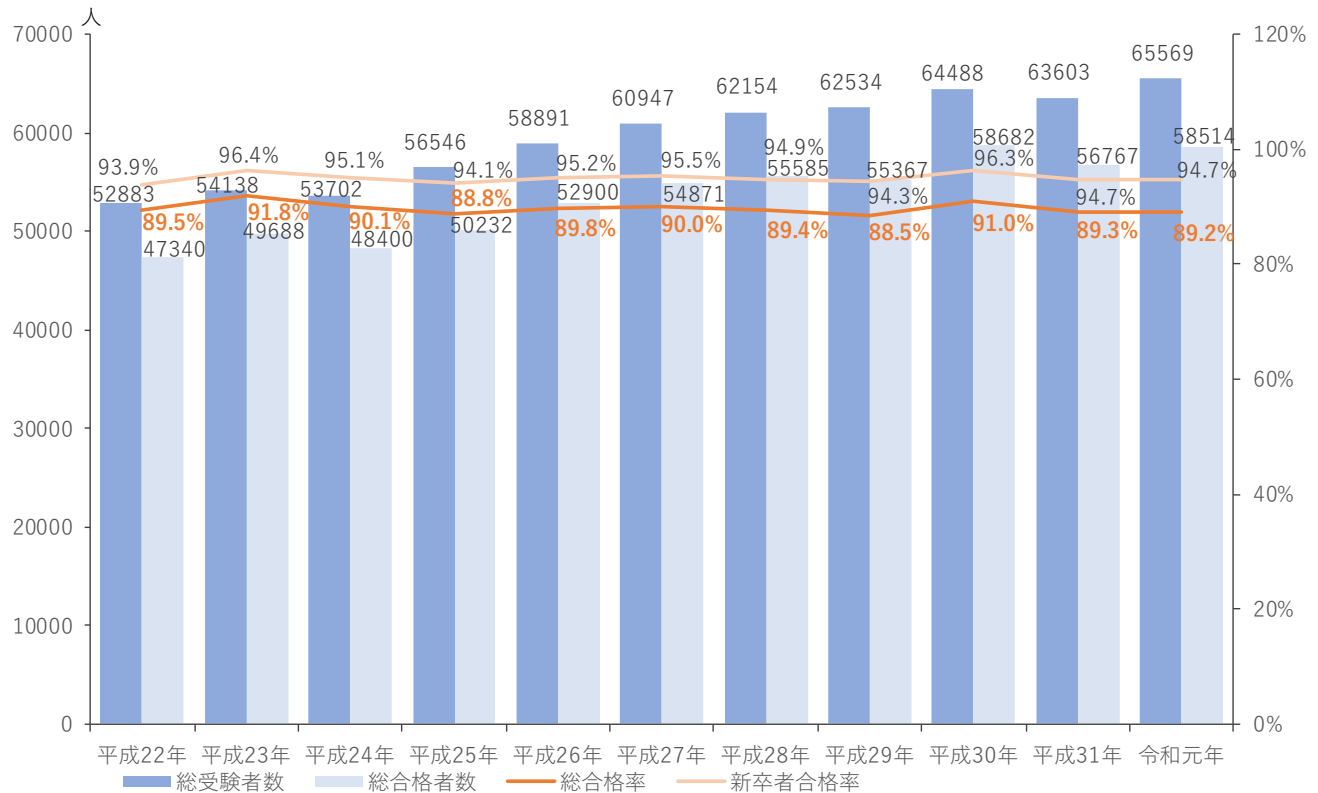
図表 26 助産師国家試験合格状況



② 看護師

看護師国家試験についてみると、受験者数は平成22年の52,883人から概ね増加傾向にあり、令和元年には6,5569人と、平成22年以降で最も多くなっていた。一方、合格率は、総合合格率は9割前後、新卒者合格率は90%台半ばと、水準にはやや差があるものの、共に横ばいで推移していた。

図表 27 看護師国家試験合格状況



(2) 文字数との相関

総合合格率と各年の文字数との相関係数をみると、保健師では総文字数では-0.67、一般設問の文字数では-0.74、問題あたり文字数では-0.77と、それぞれ有意に負の値となっていた。保健師について2015年以降に限定してみると、総文字数、状況設定文の文字数、問題あたり文字数との相関係数はいずれも-0.9以上と強い負の相関を示していた。なお、助産師、看護師については有意な相関はみられなかった。

図表 28 総合合格率と文字数との相関

	N	総文字数			問題あたり文字数
			うち状況設定文	うち一般設問	
全体	20	-0.12	-0.05	-0.19	0.10
保健師	10	-0.67 *	-0.42	-0.74 **	-0.77 **
うち2015年以降	5	-0.92 *	-0.90 *	-0.73	-0.92 *
助産師	5	-0.68	-0.36	-0.88	-0.68
看護師	5	0.13	0.04	0.22	0.13

*:p < .05, **:p < .01

4— 考察

保健師助産師看護師国家試験は、保健師、助産師、看護師のそれぞれの職種に対して免許取得のために行われる。改善部会報告書では、国家試験は「職種に求められる専門性の高度化とニーズの多様化、免許取得時に求められる実践能力を問う」ものであり、「『人々の生活への支援を重視する看護に特有の状況のとらえ方と判断プロセスを問う』工夫の必要」が提言された。

本調査では、保健師、助産師、看護師の国家試験の出題形式と問題の分量について行った分析について考察を行い、その後、保健師国家試験についてさらに詳細に考察を加えた。

1 | 保健師助産師看護師国家試験の出題状況

(1) 出題形式

出題形式は、「4肢択一」は保健師、看護師では最も多いが、助産師では半数程度であり、どの職種でも増加傾向にあった。一方、「5肢択一」「5肢択二」は保健師では2~3割、看護師では2割に満たないのに対し、助産師では多くなっていた。「数値」の回答は、保健師、看護師では少ないながら出題されているが、助産師ではほとんどなかった。出題形式は職種により、またその年により差があった。正解が一つしかない知識を問うのか、いくつかの選択肢がありうる応用的な状況を問うのかは、職種の違いによると考えられる。「数値」問題は識別指数が高いと改善部会の報告書で述べられており、基礎知識をもとに判断を問うことができていると推察される。

問題の種類は、いずれの職種も「一般」が最も多く、看護師が7割を超えて最も多く、保健師、助産師が7割前後であった。『状況設定』の内訳では、2019年には保健師、助産師は「2連問」が、看護師は「3連問」が最も多かった。看護師国家試験では、看護基礎教育として正しい知識を問う問題が出題される傾向にあり、保健師国家試験及び助産師国家試験でアドバンスとして状況における判断や対処を問うているといえる。

(2) 問題の分量としての文字数

総文字数は、3職種ともに増加傾向にあり、2019年は保健師 20,669 文字（110 問；2 時間 35 分）、助産師 21,648 文字（110 問；2 時間 35 分）、看護師 37,432 文字（240 問；5 時間 20 分）であった。一方、問題ごとの文字数の幅では、3職種ともに最大値と最小値の差は概ね拡大する傾向にあることから、問題により文字数のバラツキが大きくなる傾向にあるようである。一般問題の一問題の年ごとの平均文字数は、保健師 130~150 文字前後、助産師 150~180 文字前後、看護師 120~130 文字前後であった。状況設定文の一問題の年ごとの平均文字数は、保健師 130~220 文字前後、助産師 150~270 文字前後、看護師 220~300 文字前後であった。保健師、助産師は看護師に比べて相対的に文字数が多くなっているが、状況説明が必要な問題が多いためと推察される。実践能力を問うためには、状況を確定したうえで情報の取捨選択の過程が問えなければならぬため、必然的に文字数が増加せざるを得ないと考えられる。

図表点数は、保健師では表が多く、助産師、看護師では図が多かったが、年による差が大きく、1~16 点の範囲であった。図表の活用については、例示を含めてのさらなる提言が必要である。

2 | 保健師国家試験の特徴と課題

保健師の資質向上に向けて、改善部会報告書で、提言された改善すべき事項と照らし合わせながら、「保健師に求められる専門性の高度化とニーズの多様化、免許取得時に求められる実践能力を問う」という観点から、保健師国家試験の状況をさらに具体的に検討する。

(1) 出題内容

保健師国家試験では、健康問題の複雑化や健康格差の拡大の社会背景を踏まえて、地域住民や多職種・他機関と連携・協働しながら、健康課題を解決すること及び施策化することなど、医学や公衆衛生の知識を含めた公衆衛生看護活動の根拠となる知識の出題、保健師免許を基礎資格とする産業保健や学校保健で業務に必要な知識や能力を問うことなどが改善部会報告書で提言された。数量的分析からだけでは、これらのことを判断することはできなかった。良問および問題となる出題に関して、質的な分析が必要である。

(2) 状況設定問題について

改善部会報告書では、出題類型を明確にして、出題意図を明確にする必要があること、状況を提示する情報は判断や介入に必要な情報のみならず、情報を取捨選択することも含めて問う必要があること、個別状況においてアセスメントを行い状況に合わせた介入を判断する能力、つまり思考や判断プロセスを問う問題を積極的に出題することが提言され、そのためには、2連問や単問での出題の工夫が説明された。

保健師国家試験では、状況設定問題は3割程度で、2017年からは3連問が少なくなり、2連問が増加し、単問も出題されるようになった。保健師では、助産師、看護師よりも状況設定問題の割合は高く、実践的な場面での判断を問う問題が多い。2連問にすることで、問題の連動性を回避できるようになったと推察される。状況設定において、地域における日常生活の種々雑多な情報を選別して、根拠に基づく適切な推論で課題を明確にし、適切な支援を選択できるような問題が作成されることが望まれる。

状況設定問題が多くなるに従い、総文字数が増加する可能性がある。試験問題として、状況を明確に説明する必要性および現実の状況に近い状況設定をするためには、一問がある程度の長さになることはやむを得ない。問題文の総文字数の最高が助産師で約24,500文字(2017年、2018年)であったことから、この程度を最大にして、総文字量を検討するとよいであろう。

(3) 出題形式について

改善部会報告書では、一般問題と状況設定問題で出題の意図に適した肢数や形式を継続すること、非選択式の計算問題は識別指数が高く保健師国家試験では増問の工夫をすることが提言された。

「4肢択一」、「5肢択一」、「5肢択二」、「数値問題」と多様な形式で出題されていた。公衆衛生看護活動の支援においては、状況が複雑であり、また地域での活用できる資源の多様性が増加しているため、選択肢を一つに限定できないことも多く、「5肢択二」の出題が他の職種よりも多くなると推察される。しかし、「5肢択二」の場合には選択肢にあいまいさを残さないように留意する必要がある。

非選択式の数値問題は例年1~2問程度の出題であった。これらは、疫学や保健統計の領域として出題されやすいが、地域のアセスメントや保健指導においてもデータを読み取ったうえで計算す

るという問題設定も検討していくことができるであろう。

数値回答以外の出題形式における問いでは、「優先度」を問う形式が1割前後あった。保健師の支援の実際において、日常生活では選択肢は一つではなく多くの可能性が考えられるため優先性を問う問題が出題されるが、他の職種には見られない保健師の特性である。「正しい」選択肢を回答する問題が増加傾向にあり、評価領域分類Ⅰ型との関連を検討する必要がある。

(4) 評価領域分類 (Taxonomy) について

改善部会報告書では、保健師国家試験では評価領域分類Ⅱ型やⅢ型を増加することを提言された。

評価領域分類は、2015年以降一貫してⅠ型とⅠ'型が60%程度を占め、Ⅱ型が30~35%、Ⅲ型は5%前後であった。状況設定問題が3割程度出題されているので、評価領域分類レベルでⅢ型を増加させる工夫が必要であろう。実践者である保健師としての判断能力や支援の能力を問うためには、根拠の判断と状況の判断を兼ね合わせた問題の出題が必要である。

(5) 視覚素材・図表について

改善部会報告書では、写真やカラーによる出題、イラスト・図表の積極的活用が提言され、保健師国家試験の具体例として地域診断に必要なグラフ化されたデータや表をもとに判断を問うことが示された。

図表に関して、保健師国家試験の特徴は問題文内に表が配置されることであり、別冊で提示されることはほとんどなかった。保健師のとして必要な活動場面で出会うある状況の観察の判断など、写真やカラーによる出題は今後の課題である。図表の数に関しては、2017年以降、3~9個で、図の活用は表よりも少なかったが、割合は増加していた。

表については、一つの表の大きさには差があった。情報量の多い表では読み取りと判断の難易度が上がるため、1回の国家試験での総合的なバランスを考慮する必要がある。しかし、表の読み取りと判断は情報量のみの問題ではなく、読み取りの根拠となる医学的判断、看護判断、疫学的判断、政策的判断など問題の出題意図がより重要となる。

研究 2 保健師国家試験問題の質的分析

1— 調査・分析の背景・目的

1 | 調査・分析の背景

平成 28 年 2 月にとりまとめられた改善部会報告書では、保健師助産師看護師国家試験問題について改善すべき事項として、「基礎的知識を状況に適用して判断を行う能力を問う」ことに留意しながら、「人々の生活への支援を重視する看護に特有の状況の捉え方と判断プロセスを問う」工夫が必要であるとし、特に保健師国家試験については、「健康問題の複雑化や健康格差の拡大等の社会背景を踏まえて、地域住民や多職種・他機関と連携・協働しながら、健康課題を解決すること及び施策化することなど、保健師に求められる役割や能力についての出題内容の充実が必要」と指摘している。

また、同報告書では、「介入を通して直接得る多様な情報を段階的・総合的に判断した上で、患者や家族等と共に看護を決定していくプロセスを問う必要」を強調しており、出題の方法として「①判断プロセスについて問う、②判断そのものを問う、③判断するために必要な情報は何かを問う、④情報を列記したなかで優先度を問う、⑤介入の結果から判断の根拠を問うなどの方法」を、出題内容に合わせて選択して出題することが望ましいとしている。特に状況設定問題は、状況設定問題の状況として提示する情報については、「判断や介入に必要な情報のみならず、情報を取捨選択するという含めて問う必要」があるとし、「判断によって次のケアを選択するという思考のプロセスを問う問題は、解答を連動させない連問での出題が困難な場合があり、現行の 2 連問又は 3 連問の状況設定問題に加え、長い状況文を付した単問の状況設定問題を導入」することを提案している。

さらに、保健師国家試験問題については、更なる出題形式について工夫すること、評価領域分類 (Taxonomy) II 型や III 型の出題を増やす改善が必要であること、視覚素材について、地図、住宅見取り図や図表等のデータをもとに情報を理解・解釈して必要な介入を判断するような問題を導入することにより、状況判断能力や実践能力を問うよう工夫することが望ましいと指摘している。

同報告書を受けて、平成 30 年には「保健師助産師国家試験出題基準」(厚生労働省医政局看護課, 2018) が改訂され、保健師助産師看護師国家試験問題は改善・工夫されていると推察されるが、保健師が扱う事例は複雑化・多様化している。そこで、保健師の状況判断能力や実践能力を問う保健師国家試験問題が出題されているのかを定性的に分析し、新たな課題を検討する必要があると考える。

2 | 調査・分析の目的

平成 28 年 2 月の改善部会報告書より、保健師国家試験においては「社会背景を踏まえ地域住民や他職種・他機関と連携・協働しながら、健康課題を解決すること及び施策化することなど保健師に求められる役割や能力についての出題内容の充実が必要」とされた。しかし、これらの報告書に基づき改善がなされ、保健師に求められる役割や能力を評価する国家試験問題となっているか、これまで定性的な評価が実施されていない。

そこで今回、過去 3 年間の保健師国家試験の問題を質的に評価するために以下の調査・分析を実施した。

調査分析 1：研究者らで良問と抽出した問題について、出題の意図、出題形式、評価領域分類

(Taxonomy)、出題内容等について定性的に分析し評価する。

調査分析2：状況設定の単問として出題された4問について、出題の意図、出題形式、評価領域分類 (Taxonomy)、出題内容等について定性的に分析し評価する。

2—— 調査・分析の内容および方法

1 | 調査・分析の対象

(1) 調査・分析1

公表されている保健師国家試験問題から、過去3年間(103回から105回)の保健師国家試験問題について、評価領域分類 (Taxonomy) がI'型以上の問題を対象として、良問を選定した。良問の選定要件は、以下の2点とした。

・国家試験委員会が全問調査における分析の際に良問と判断している要素(出題意図が明確である、難度が適切である、知識を基に判断を求めている、多くの情報から必要な情報を読み取らせている、情報の中に図表を効果的に用いている、問題解決力や実践力を問うている、ハイリスクに関する知識や支援方法や優先度を問うている、適度な魅惑肢を設け判別力を問うている)を含む問題

・改善部会報告書において、今後、保健師国家試験の出題内容の充実が必要とされた「健康問題の複雑化や健康格差の拡大等の社会背景を踏まえて、地域住民や多職種・他機関と連携・協働しながら、健康課題を解決すること及び施策化することなど保健師に求められる役割や能力」を問うている問題

以上により選定したところ、55問であったため、それらを分析対象とした。

(2) 調査・分析2

公表されている保健師国家試験問題から、過去3年間(103回から105回)の保健師国家試験問題について、状況設定の単問をすべて抽出したところ4問であったため、4問を分析対象とした。

2 | 調査・分析の内容および方法

(1) 調査・分析1

選定した55問について、①出題基準(領域/大項目/中項目)、②問題の種類(一般問題/状況設定問題)、③出題方法(正誤または適切/最も適切/優先度)、④出題形式(4肢択一/5肢択一/5肢択二/数値)、⑤、評価領域分類 (Taxonomy) (I'型/II型/III型)、⑥難度(適切/高い/低い)、⑦文章以外の情報(表、図、別冊の有無)について、分類ごとの割合を分析した。なお、①出題基準は研究者らが保健師国家試験出題基準に照らし合わせ読み取った出題基準を活用し、出題回別の割合も併せて分析した。⑤評価領域分類 (Taxonomy) は当協議会国家試験委員会が毎年実施している内容調査時に判断した結果を活用した。⑥は研究者らで検討し判断した。

さらに、問題文と選択肢から、解答する際に必要と考えられる保健師の基礎的能力を問題文を読み解いながら、質的に抽出し大別した。

以上を項目別に該当問題数を集計し、良問として選定した問題の出題傾向を分析した。

(2) 調査・分析2

選定した4問について、作問する際に設定が必要な項目：①問題の種類(一般問題/状況設定問

題)、②出題基準(領域/大項目/中項目)、③出題方法(正誤または適切/最も適切/優先度)、④出題形式(4肢択一/5肢択一/5肢択二/数値)、⑤評価領域分類(Taxonomy)(I'型/II型/III型)、⑥難度(適切/高い/低い)、⑦文字情報以外の情報(表、図、別冊の有無)⑧解答するにあたり必要と考えられる保健師の基礎的能力、について分析した。⑤評価領域分類(Taxonomy)は当協議会国家試験委員会が毎年実施している内容調査時に判断した結果を活用し、②⑥⑧は研究者らで検討し判断した。また4問について、「情報の要素」「解答に必要な知識」「検討された内容」「考えられる改善点」について、研究者らで検討した。

3—— 結果

1 | 調査・分析1

(1) 良問として選定した問題の出題傾向

分析項目「出題基準」は、103回から105回の全問題330問の出題領域、および良問として選定した問題(以下、「良問」という。)について、保健師国家試験出題基準に基づき出題領域を読み取った結果は、表1のとおりであった。出題領域別にみると良問と選定された問題は、「対象別公衆衛生看護活動論」が55問中30問を占めていた。次いで、「疫学」7問(12.7%)、「健康危機管理」6問(10.9%)、「公衆衛生看護方法論II」5問(9.1%)、「公衆衛生看護方法論I」4問(7.2%)、「学校保健・産業保健」3問(5.5%)であった。良問が選定されなかった出題領域は「公衆衛生看護学概論」、「公衆衛生看護管理論」、「保健統計」、「保健医療福祉行政論」の4領域あった。出題領域別問題総数に占める良問の割合は、「対象別公衆衛生看護活動論」が30問(33.0%)と最も多く、次いで「疫学」7問(25.9%)、「健康危機管理」6問(21.4%)、「公衆衛生看護方法論II」5問(13.9%)、「公衆衛生看護方法論I」4問(13.8%)、「学校保健・産業保健」3問(11.5%)であった。

出題回別では、良問数は、103回23問、104回と105回は各々16問であった。出題領域別問題総数に占める良問の割合をみた結果、103回においては「学校保健・産業保健」、「疫学」とも3問(37.5%)で多かったが、全問題数に占める出題数が多い「対象別公衆衛生看護活動論」がどの出題回においても多く、103回9問(31.0%)、104回12問(35.3%)、105回10問(35.7%)であった。

分析項目「問題の種類」以降の6項目については、表2のとおりであった。

問題の種類は、「状況設定問題」が44(80.0%)であったところ、「一般問題」が11問(20.0%)であった。

出題方法は、「正誤または適切なものを選択する」が22問(40.0%)と最も多く、次いで「最も適切なものを選択する」が19問(34.5%)、「(最も)優先するものを選択する」が13問(23.6%)、「数値」を算出する問題が1問(1.8%)であった。

出題形式は、「4肢択一」が38問(69.1%)、「5肢択一」が15問(27.3%)、「5肢択二」が1問(1.8%)、「数値」が1問(1.8%)であった。

評価領域分類(Taxonomy)レベルは、II型が30問(54.5%)と最も多く過半数を占め、次いでIII型が14問(25.5%)、I'型は11問(20.0%)であった。

難度については、良問を選定する際には適切な難度であることを条件としたが、連問の状況設定問題では、低すぎる難度の問題は除き、やや低い難度の問題も含めて選出したため、低い難度に区分した問題が55問中に2問(3.6%)であった。

文章以外の情報の有無では、「なし：文字のみ」が41問（74.5%）と約4分の3を占めていた。「有り」は、「表」9問（16.4%）、「図」4問（7.3%）、「別冊（写真映像）」1問（1.8%）であった。

さらに、良問を選定した際の2つの視点を踏まえ、良問に含まれる「解答するにあたり必要な能力」としての要素を分析した結果、11の項目：「情報の判断・選別」、「情報追加・探索的思考」、「課題の明確化」、「適切な支援の判断」、「必要な活動・対策の判断」、「多職種・他機関との連携」、「地域ケアシステムづくり」、「健康課題の事業化・施策化」、「時代の要請課題の理解」、「支援が必要な対象理解」、「統計学的分析の活用」であった。55の良問に含まれる要素を分類した結果は表3のとおりであった（複数該当）。最も多かったのは、「課題の明確化」40問（72.7%）、次いで「情報の判断・選別」29問（52.7%）、「適切な支援の判断」25問（45.5%）であった。

なお、良問として選定した55問の一覧表は表4に示した。

表1 全問題および良問の出題領域別問題数－出題回別－

読み取った出題領域 (大項目)	合計				103回				104回				105回			
	全問題		良問		全問題		良問		全問題		良問		全問題		良問	
	問題数	割合(%)	問題数	割合(%)	問題数	割合(%)	問題数	割合(%)	問題数	割合(%)	問題数	割合(%)	問題数	割合(%)	問題数	割合(%)
公衆衛生看護学概論	16	4.8	0	0.0	4	3.6	0	0.0	6	5.5	0	0.0	6	5.5	0	0.0
公衆衛生看護方法論 I (個人・家族・グループへの支援)	29	8.8	4	13.8	11	10.0	4	36.4	11	10.0	0	0.0	7	6.4	0	0.0
公衆衛生看護方法論 II (地域組織・地域への支援、事業化と施策化)	36	10.9	5	13.9	11	10.0	3	27.3	13	11.8	0	0.0	12	10.9	2	16.7
対象別公衆衛生看護活動論	91	27.6	30	33.0	29	26.4	9	31.0	34	30.9	12	35.3	28	25.5	10	35.7
学校保健・産業保健	26	7.9	3	11.5	8	7.3	3	37.5	8	7.3	0	0.0	10	9.1	0	0.0
健康危機管理	28	8.5	6	21.4	10	9.1	2	20.0	6	5.5	0	0.0	12	10.9	4	33.3
公衆衛生看護管理論	8	2.4	0	0.0	2	1.8	0	0.0	3	2.7	0	0.0	3	2.7	0	0.0
疫学	27	8.2	7	25.9	8	7.3	3	37.5	10	9.1	4	40.0	9	8.2	0	0.0
保健統計	23	7.0	0	0.0	9	8.2	0	0.0	5	4.5	0	0.0	9	8.2	0	0.0
保健医療福祉行政論	46	13.9	0	0.0	18	16.4	0	0.0	14	12.7	0	0.0	14	12.7	0	0.0
合計	330	100.0	55	16.7	110	100.0	24	21.8	110	100.0	16	14.5	110	100.0	16	14.5

表2 良問として選定した問題の出題傾向

分析項目		N=55	
		n	(%)
問題種類	一般長文	11	20.0
	状況設定	44	80.0
出題方法	正誤(適切含む)	22	40.0
	最適	19	34.5
	優先度	13	23.6
	数値	1	1.8
出題形式	4肢択一	38	69.1
	5肢択一	15	27.3
	5肢択二	1	1.8
	数値	1	1.8
評価領域分類	I'型	11	20.0
	II型	30	54.5
	III型	14	25.5
難度	適切	53	96.4
	高い	0	0.0
	低い	2	3.6
文章以外の情報(図、表、別冊)	なし	41	74.5
	有り:表	9	16.4
	有り:図	4	7.3
	有り:別冊(映像)	1	1.8

表3 解答に必要な保健師の基礎的能力

項目	(重複該当) N=55	
	n	(%)
情報の判断・選別	29	52.7
情報追加・探索的思考	11	20.0
課題の明確化	40	72.7
適切な支援の判断	25	45.5
必要な活動・対策の判断	16	29.1
多職種・他機関との連携	9	16.4
地域ケアシステムづくり	5	9.1
健康課題の事業化・施策化	2	3.6
時代が要請する健康課題	19	34.5
支援が必要な対象理解	10	18.2
統計学的分析の活用	6	10.9

表4 保健師国家試験問題 103回・104回・105回から抽出した良問一覧

No.	回数	午前 午後	問題 番号	問題 種類	出題基準 ^{※1)} 出題領域/大項目 ^{※2)}	出題 方法	出題 形式	評価領域 分類	難度	文章以外 の情報
1	103回	午前	12	一般長文	対象別公衆衛生看護活動論/障害者(児)保健活動	最適	4肢択1	Ⅲ	適切	なし
2	103回	午前	30	一般長文	対象別公衆衛生看護活動論/母子保健活動	最適	5肢択1	Ⅲ	適切	なし
3	103回	午前	46	状況設定	健康危機管理/感染症集団発生時の保健活動	最適	4肢択1	Ⅲ	適切	表
4	103回	午前	47	状況設定	健康危機管理/感染症集団発生時の保健活動	優先	5肢択1	Ⅱ	適切	なし
5	103回	午前	52	状況設定	公衆衛生看護方法論Ⅱ(組織・集団・地域支援方法論)/地区活動	最適	4肢択1	Ⅲ	適切	なし
6	103回	午前	53	状況設定	公衆衛生看護方法論Ⅱ(組織・集団・地域支援方法論)/活動の計画・実践・評価	最適	5肢択1	Ⅲ	適切	なし
7	103回	午前	54	状況設定	対象別公衆衛生看護活動論/高齢者保健活動	最適	4肢択1	Ⅲ	適切	なし
8	103回	午前	55	状況設定	対象別公衆衛生看護活動論/高齢者保健活動	優先	5肢択1	Ⅲ	適切	なし
9	103回	午後	6	一般長文	公衆衛生看護方法論Ⅱ(組織・集団・地域支援方法論)/地域診断	優先	4肢択1	Ⅲ	適切	なし
10	103回	午後	8	一般長文	公衆衛生看護方法論Ⅰ(個人・家族・グループ支援方法論)/公衆衛生看護の対象となる人々	正誤	4肢択1	Ⅱ	適切	なし
11	103回	午後	36	状況設定	公衆衛生看護方法論Ⅰ(個人・家族・グループ支援方法論)/家庭訪問	正誤	5肢択1	I'	適切	なし
12	103回	午後	37	状況設定	公衆衛生看護方法論Ⅰ(個人・家族・グループ支援方法論)/家庭訪問	正誤	5肢択1	Ⅱ	適切	なし
13	103回	午後	38	状況設定	公衆衛生看護方法論Ⅰ(個人・家族・グループ支援方法論)/家庭訪問	最適	4肢択1	Ⅱ	適切	なし
14	103回	午後	42	状況設定	学校保健・産業保健/学校保健	正誤	4肢択1	Ⅱ	適切	なし
15	103回	午後	43	状況設定	学校保健・産業保健/学校保健	正誤	4肢択1	Ⅱ	適切	なし
16	103回	午後	44	状況設定	学校保健・産業保健/学校保健	最適	4肢択1	Ⅲ	適切	なし
17	103回	午後	45	状況設定	疫学/暴露効果の指標	正誤	5肢択1	I'	適切	表
18	103回	午後	46	状況設定	疫学/暴露効果の指標	最適	4肢択1	I'	適切	表
19	103回	午後	47	状況設定	疫学/暴露効果の指標	正誤	4肢択1	Ⅲ	適切	表
20	103回	午後	48	状況設定	対象別公衆衛生看護活動論/母子保健活動	正誤	4肢択1	I'	適切	なし
21	103回	午後	49	状況設定	対象別公衆衛生看護活動論/母子保健活動	優先	4肢択1	Ⅱ	適切	なし
22	103回	午後	52	状況設定	対象別公衆衛生看護活動論/成人保健活動	正誤	4肢択1	Ⅱ	適切	なし
23	103回	午後	53	状況設定	対象別公衆衛生看護活動論/成人保健活動	最適	4肢択1	Ⅲ	適切	なし
24	104回	午前	8	一般長文	対象別公衆衛生看護活動論/精神保健活動	最適	4肢択1	Ⅱ	適切	なし
25	104回	午前	32	一般長文	疫学/疾病頻度の指標	正誤	5肢択1	Ⅱ	適切	図
26	104回	午前	41	状況設定	対象別公衆衛生看護活動論/母子保健活動、女性の健康支援	優先	4肢択1	Ⅱ	適切	なし
27	104回	午前	42	状況設定	対象別公衆衛生看護活動論/母子保健活動、女性の健康支援	最適	4肢択1	I'	適切	なし
28	104回	午前	44	状況設定	対象別公衆衛生看護活動論/感染症の保健活動	正誤	4肢択1	I'	適切	なし
29	104回	午前	45	状況設定	対象別公衆衛生看護活動論/感染症の保健活動	正誤	5肢択1	Ⅱ	適切	表

No.	回数	午前 午後	問題 番号	問題 種類	出題基準 ^{※1)} 出題領域/大項目 ^{※2)}	出題 方法	出題 形式	評価領域 分類	難度	文章以外 の情報
30	104回	午前	46	状況設定	対象別公衆衛生看護活動論/感染症の保健活動	正誤	5肢択1	Ⅱ	適切	なし
31	104回	午前	47	状況設定	対象別公衆衛生看護活動論/母子保健活動、女性の健康支援	優先度	4肢択1	Ⅱ	適切	図
32	104回	午前	48	状況設定	対象別公衆衛生看護活動論/母子保健活動、女性の健康支援	優先度	4肢択1	Ⅱ	適切	図
33	104回	午前	51	状況設定	対象別公衆衛生看護活動論/難病保健活動/	最適	4肢択1	I'	適切	なし
34	104回	午前	52	状況設定	対象別公衆衛生看護活動論/難病保健活動	最適	4肢択1	Ⅱ	適切	なし
35	104回	午後	12	一般長文	対象別公衆衛生看護活動論/母子保健活動、女性の健康支援	最適	4肢択1	Ⅲ	適切	なし
36	104回	午後	18	一般長文	対象別公衆衛生看護活動論/母子保健活動、女性の健康支援	最適	4肢択1	Ⅱ	適切	なし
37	104回	午後	42	状況設定	疫学/疫学調査法	正誤	5肢択1	I'	適切	なし
38	104回	午後	43	状況設定	疫学/疫学調査法	正誤	5肢択1	I'	適切	なし
39	104回	午後	44	状況設定	疫学/曝露効果の指標		数値	I'	適切	表
40	105回	午前	4	一般長文	対象別公衆衛生看護活動論/母子保健活動、女性の健康支援	正誤	4肢択1	Ⅱ	適切	別冊
41	105回	午前	12	一般長文	対象別公衆衛生看護活動論/精神保健活動	正誤	4肢択1	Ⅱ	適切	なし
42	105回	午前	41	状況設定	健康危機管理/感染症の集団発生への保健活動	正誤	5肢択2	Ⅱ	適切	なし
43	105回	午前	42	状況設定	健康危機管理/感染症の集団発生への保健活動	優先度	4肢択1	Ⅱ	適切	表
44	105回	午前	43	状況設定	健康危機管理/感染症の集団発生への保健活動	正誤	4肢択1	Ⅱ	適切	なし
45	105回	午前	52	状況設定	公衆衛生看護方法論Ⅱ(地域組織・地域への支援、事業化と施策化)/地域アセスメント<地域診断>	優先度	5肢択1	Ⅱ	適切	なし
46	105回	午前	53	状況設定	公衆衛生看護方法論Ⅱ(地域組織・地域への支援、事業化と施策化)/保健医療福祉における事業化と施策化	優先度	5肢択1	Ⅱ	低い	なし
47	105回	午前	54	状況設定	対象別公衆衛生看護活動論/難病保健活動	正誤	4肢択1	Ⅱ	適切	なし
48	105回	午前	55	状況設定	対象別公衆衛生看護活動論/難病保健活動	優先度	4肢択1	Ⅱ	適切	図
49	105回	午後	5	一般長文	対象別公衆衛生看護活動論/高齢者保健活動	最適	4肢択1	Ⅱ	適切	なし
50	105回	午後	36	状況設定	対象別公衆衛生看護活動論/精神保健活動	優先度	4肢択1	Ⅲ	適切	なし
51	105回	午後	37	状況設定	対象別公衆衛生看護活動論/精神保健活動	最適	4肢択1	Ⅱ	適切	なし
52	105回	午後	38	状況設定	対象別公衆衛生看護活動論/精神保健活動/	正誤	4肢択1	I'	低い	なし
53	105回	午後	39	状況設定	健康危機管理/感染症の集団発生への保健活動	正誤	4肢択1	Ⅲ	適切	なし
54	105回	午後	47	状況設定	対象別公衆衛生看護活動論/母子保健活動、女性の健康支援	優先度	5肢択1	Ⅱ	適切	表
55	105回	午後	48	状況設定	対象別公衆衛生看護活動論/母子保健活動、女性の健康支援	最適	4肢択1	Ⅱ	適切	表

※1) 出題基準：103回は「保健師国家試験出題基準 平成26年版」、104回・105回は「保健師国家試験出題基準 平成30年版」を用いた。

※2) 大項目：出題基準の大項目の意味を損なわないように略して表記した。および、1つの問題に複数の項目がある場合は並記した。

2 | 調査・分析 2

(1) 状況設定単問の概要

状況設定の単問に該当し、分析対象とした4問の概要を表5に示す。

103回からの出題2問、104回および105回からの出題がそれぞれ1問であった。出題基準では「対象別公衆衛生看護活動論」と「保健医療福祉行政論」から各1問、「学校保健・産業保健」領域から、いずれも産業保健に関する問題が2問であった。

出題方法は4問中3問が優先度を問う問題、出題形式は4問中3問が4肢択一であった。評価領域分類(Taxonomy)はI'型とII型がそれぞれ1問、III型が2問であり、難度は4問中3問が「低い」であり、文字情報以外は活用されていなかった。また調査1において、良問に含まれる「解答するにあたり必要な能力」としての要素を分析して抽出された11の項目に該当するかを分析した。その結果、4問中すべてで「情報の判断・選別」「課題の明確化」が必要とされ、4問中3問で「必要な活動・対策の判断」、4問中2問で「時代の要請課題の理解」が必要とされていたが、「適切な支援の判断」「多職種・他機関との連携」「地域ケアシステムづくり」「健康課題の事業化・施策化」「統計学的根拠の活用」が必要とされる問題はなかった。

表5 状況設定単問の概要

問題番号	出題基準 出題領域/大項目/中項目	出題方法	出題形式	評価領域分類	難度	文字情報以外の情報	解答にあたり必要な能力										
							情報の判断・選別	情報追加・探索的思考	課題の明確化	適切な支援の判断	必要な活動・対策の判断	多職種・他機関との連携	地域ケアシステムづくり	健康課題の事業化・施策化	時代の要請課題の理解	支援が必要な対象理解	統計学的根拠の活用
103回 午後54	対象別公衆衛生看護活動論/母子保健/女性のライフステージの保健指導	優先度	5肢択一	III	低い	なし	●	●	●							●	
103回 午後55	保健医療福祉行政論/保健医療福祉行政の分野と制度/医療提供体制	正誤	4肢択一	III	適切	なし	●		●		●					●	
104回 午前55	学校保健・産業保健/産業保健/保健師・第一種衛生管理者の活動の実際	優先度	4肢択一	II	低い	なし	●		●		●						
105回 午後55	学校保健・産業保健/産業保健における対象の健康課題への対策と支援/対象の主な健康課題への対策と支援	優先度	4肢択一	I'	低い	なし	●		●		●						

(2) 各問題の分析結果

4問の分析結果を、以下に示す。

① 第 103 回午後 54 問

次の文を読み 54 の問いに答えよ。

A さん (39 歳、女性、教員)。夫 (40 歳、会社員) と長男 (7 歳) との 3 人暮らし。A さんは小学校で 6 年生の担任をしている。夫は仕事で土日にも不在のことが多い。長男は放課後に学童保育に通っている。A さんは 2 か月間月経がみられないため、自宅近くの産婦人科を受診したところ妊娠 11 週と診断され、妊娠届を提出するよう指導された。妊娠 16 週に妊娠届を提出するため保健センターに来所した。保健センターでは、妊娠届の提出に来所した妊婦全員に保健師による面接を実施している。保健師は現在の健康状態、妊娠経過および分娩予定施設について A さんに確認した。

54 今後の A さんへの支援を計画するために最も優先して確認するのはどれか。

1. つわりの有無
2. 育児用品の準備状況
3. 妊娠届が遅れた理由
4. 子宮がん検診の受診歴
5. 不妊治療の経験の有無

< 正解 3 >

情報の要素：

個別事例の状況：勤労妊婦である A さんの健康状態

受診行動：妊娠経過は 11 週で受診診断

家族構成・家族状況：夫、小学生児

生活状況：共働きで夫も不在がち

場面：保健センター 来所目的：妊娠届の提出

保健師の対応：面接による情報収集と支援計画

設問の意図：

妊娠届が遅い勤労妊婦への母子手帳交付時の支援計画での情報収集の優先事項

解答に必要な知識：

妊娠届を提出する時期

提出が遅れる場合のリスク

検討された内容：

1) 改善のために検討が必要な点

- ・選択肢は 5 肢択一である上に、「今後の A さんへの支援を計画するための」最優先事項を選択するため、状況設定文を読解する力だけでなく、保健師として A さんの支援を考えるとという具体的な問題解決を求める評価領域分類 (Taxonomy) III 型の問題であるが、妊娠届を提出する時期についての知識があれば正解を選択できることから、結果的に難易度が低い問題

となっている可能性がある。

- ・今後の A さんへの支援を計画するために最も優先して確認する内容を問うているが、「今後の」という表現が漠然としており、今後の何の支援を計画するために最も優先して確認する内容を問うているのかがやや曖昧である。
- ・状況文で保健師はすでに来所した A さんにいくつか確認しているが、問題文も情報として確認する内容を問うており、受験生に次の支援を考える思考のプロセスを踏ませる問題となっていない。

2) 評価できる点

- ・妊娠届が遅れる妊婦はハイリスクであることが多く、その理由を確認することは重要であり、近年の健康課題を捉えた問題である。
- ・保健師は潜在化している健康課題を明確にし、今後起こりうる健康課題を予測することが求められる。妊娠 11 週と診断されて妊娠届を提出するよう指導されたにも関わらず 16 週に妊娠届を提出しに来所した妊婦に対して、何らかの問題を抱えているのではないかとアセスメントできるか、健康課題を予測した上でその支援計画を想定して確認すべき事項の優先順位を判断させるという点では、保健師の実践能力を問う問題となっている。
- ・家族状況や仕事の状況などの情報が状況設定文に記載されており、受験生は多くの情報出題の意図に照らし合わせ、必要な情報を取捨選択することが求められ、状況設定の単問としての特性を活かした出題となっている。

より良問とするための改善の方向性：

- ・情報収集の段階に留まっているが、妊娠届が遅れた妊婦の支援をどのように展開するのかなど、収集した情報の判断、あるいは判断したことから次の段階として支援計画を問う問題に改善することも一つである。

② 第 103 回午後 55 問

次の文を読み 55 の問いに答えよ。

A さん（76 歳、女性）。夫（70 歳）が早期の直腸癌と診断され、手術を受けた直後に死亡した。1 か月後、A さんは、医療安全支援センターの相談窓口が設置されている保健所に、電話で相談し「主治医から簡単な手術だと説明を受けて手術に同意したが、夫は手術後に亡くなった。納得できないので調査して欲しい」と訴えた。A さんの希望で、保健所が病院に対して文書で A さんの夫の治療経過を照会したところ「A さんの夫はまれに発生する術後合併症によって死亡した。術後合併症のことは、患者と A さんとに事前に説明していた。医療事故とは考えていない」と回答があった。

55 保健所の対応で適切なのはどれか。

1. A さんと病院とで話し合いの場が持てるように支援する。
2. A さんの夫の手術に関する診療録を病院に開示請求する。
3. 医療行為と死亡との因果関係の有無を明らかにする。
4. 病院に対し事故調査委員会を設置するよう指導する。

<正解 1>

情報の要素：

個別事例の状況：配偶者を手術後に亡くした妻

主訴となる事故の経過：A さんの夫の状況（死亡経過）と主訴

場面：保健所での医療事故の相談

保健所での最初の対応と経過

設問の意図：

医療安全支援センターとしての保健所の適切な対応

解答に必要な知識：

医療安全支援センターの役割・機能

検討された内容：

1) 改善のために検討が必要な点

- ・理解している知識を応用して具体的な問題解決を求める評価領域分類（Taxonomy）Ⅲ型の問題であり、保健所に医療安全支援センターの相談窓口が設定されていることと、その役割・機能についての基本的な知識がないと解答できない問題である。
- ・解答に必要な能力は 4 項目に該当し、難度は適切であると評価したが、一方で状況設定問題として出題するには、医療安全支援センターとしての保健所の対応を実習等で体験している受験生が少なく、場面をイメージしにくかった可能性がある。

2) 評価できる点

- ・医療安全については近年の社会背景を反映した課題であり、出題することは重要である。
- ・保健所の医療安全支援センターの相談窓口の役割・機能として何ができるのかという知識があることは前提として、相談者の状況や保健所での最初の対応と経過という複数の情報から、

相談者の思いに寄り添った支援を思考できるかを問う問題であり、状況設定の単問としての特性を活かした出題である。

- ・配偶者を手術後に亡くしたという状況から、保健所に電話相談があり対応しているという経過を読み取り、保健師として判断し次のケアを選択するという思考のプロセスを問う問題となっている。
- ・初回の相談対応をした保健師とは別の保健師が次に相談対応に当たるという場面は、保健師の実践では多くみられ、記録や相談者の発言からこれまでの経過を把握し、適切な対応ができるかどうか、保健師の実践能力を問う問題として評価できる。

より良問とするための改善の方向性：

- ・実習での体験が乏しく受験生がイメージしにくい状況であれば、知識の定着を図るために、医療安全支援センターの役割・機能に関する一般問題としてまず出題することも一つかもしれない。
- ・医療安全支援センターの窓口の保健師が A さんから、「どこに相談にいけばよいか」などと相談された場合の対応を問う問題とすることにより、複数の情報から取捨選択し、判断して次の対応を考えるという思考のプロセスを受験生に踏ませることができ、保健師の実践能力を問う問題にすることも可能であると考えられる。

③ 第 104 回午前 55 問

次の文を読み 55 の問いに答えよ。

従業員 300 人の文具会社。部署は開発部門、販売部門、広報部門に分かれている。この会社の定期健康診断の問診時の主訴が多かったのは、腰痛および目の疲れであった。社内の健康管理室の保健師が、これらの主訴を配属別に分類したところ、腰痛は販売部門の配送センターの社員に特に多いことが分かった。配送センターには、注文に応じて商品の仕分け作業をする社員 50 人が働いている。健康管理室の保健師は、配送センターにおける腰痛への対策を行う必要があると考えた。

55 保健師が実施することで最も優先されるのはどれか。

1. 職場巡視を行う。
2. 腰痛を訴える者に保健指導を行う。
3. 腰痛体操を休憩時間に行うことを計画する。
4. 配送センターの社員に運動機能の測定を行う。

<正解 1>

情報の要素：

事例（企業）の状況：従業員 300 人、文具会社、販売部門を含む 3 部門

問題の状況：定期健康診断の問診時の主訴は腰痛と目の疲れ、腰痛が多いのは販売部門配送センター社員

場面：配送センターの社員は 50 人、業務は仕分け作業

設問の意図：

配送センターにおける腰痛への健康管理室保健師の対応の優先事項

解答に必要な知識：

健康管理室の保健師の業務

腰痛への対策

検討された内容：

1) 改善のために検討が必要な点

- ・設問文で与えられた情報を理解・解釈して、その結果に基づいて解答する評価領域分類 (Taxonomy) II型の問題であり、解答に必要な能力は3項目該当するが、難度は低い。
- ・情報の要素として多くの内容が含まれており、健康管理室の保健師の業務に関する基礎的知識と、支援計画の初期段階としてアセスメントをするために情報収集が必要であるという一般的な思考ができれば、状況設定文を読まなくても「職場巡視を行う」という正答肢を選択できてしまう可能性がある。
- ・情報から支援や対策を判断させる問題ではなく、すでに状況文の中に情報と判断、そして対策までのプロセスが含まれており、学生が思考のプロセスを踏まずに解答できてしまう。
- ・選択肢として、「1. 職場巡視を行う」が他の選択肢と比較し抽象度が高いので、選択肢2. 3. 4と同様に腰痛対策としての具体的な内容の選択肢とすることで、誤答肢が魅惑肢として活きると思われる。

2) 評価できる点

- ・企業に関する情報が多いため、受験生が具体的にイメージしやすく、情報を整理しながら何が問題かを思考するプロセスが求められる。
- ・定期健康診断の主訴を配属ごとに示すなど、課題が明確である。

より良問とするための改善の方向性：

- ・状況文では、「腰痛への対策を行う」までを記載するのではなく、保健師として実践すべき対策を判断するための情報を記載することに留めることで、受験生に情報から対策を判断する思考のプロセスを踏ませることができ、評価領域分類 (Taxonomy) をIII型とする問題に改善できると考える。
- ・問題文で「配送センターの責任者に話したところ、具体的な対策を示してほしいと言われた。保健師が実施することで優先されるのはどれか」とすることで、公衆衛生看護活動の実践に必要な基礎的能力を問える問題となると考える。
- ・配属ごとに定期健康診断の主訴を表に示すなど、情報の見せ方を工夫することで、受験生が必要な情報を取捨選択するという状況設定の単問としての特性を活かした問題となると考える。

④ 第 105 回午後 55 問

次の文を読み 55 の問いに答えよ。

食品加工業の A 社には、60 歳の定年後に継続雇用制度があり、65 歳まで働くことができる。今後、製造現場の定年退職者と継続雇用労働者が増加することが見込まれている。安全衛生委員会で 55 歳以上の高年齢労働者の安全な就労に向け過去の労働災害状況を分析したところ、労働災害の発生率は年齢が高くなるほど上昇し、作業場での転倒が多かった。作業場の清掃は 1 日 3 回定期的に行い、照明は 300 ルクスの全体照明である。

55 A 社の製造現場での高年齢労働者に対する労働災害防止対策への取組みで、優先度が高いのはどれか。

1. 作業場の照度を高くする。
2. 健康づくり用具を作業場に置く。
3. 高年齢労働者向けの作業を用意する。
4. 転倒が発生しやすい場所に注意喚起の掲示を行う。

<正解 4>

情報の要素：

事例（企業）の状況：食品加工業、定年後の継続雇用制度あり、定年退職者と継続雇用労働者が今後増加する見込み

問題の状況：労働災害の発生率は年齢が高いほど上昇、転倒が多い

場面：作業場の状況の清掃は 1 日 3 回、照明は 300 ルクス

設問の意図：

高年齢労働者に対する労働災害防止対策への取組みの優先事項

解答に必要な知識：

作業場の適切な照度

高齢者の労働災害の特徴

検討された内容：

1) 改善のために検討が必要な点

- ・評価領域分類（Taxonomy）は I 型であり知識に基づく常識を働かせれば解答できる問題であり、解答に必要な能力は 3 項目該当するが難度は低い。
- ・状況文に労働災害（転倒）に関する内容が含まれており、「転倒」に着目すると転倒に関する選択肢である正解肢を選択できてしまうため、作業場の清掃の頻度や照度の情報から、現在行われている対策が高年齢労働者にとって妥当であるかを判断したうえで、次の対策を考えるとという思考のプロセスを踏ませる問題に至らなかった可能性がある。
- ・問題文が高年齢労働者に対する取組みであれば 2. や 3. 選択する可能性があるが、「労働災害防止対策への取組み」と限定されたために難度が低くなった可能性がある。
- ・情報から支援や対策を判断させる問題ではなく、すでに状況文の中に情報と判断、そして対策までのプロセスが含まれており、受験生が思考のプロセスを踏まなくても解答できた可能性がある。

2) 評価できる点

- ・労働災害状況の分析を情報として示しており、公衆衛生活動の実践に即した課題として明確である。
- ・継続雇用制度に関する記述や定年退職者と継続雇用労働者が増加する傾向にあることなど、複数の情報から必要な情報を取捨選択させるという点で、状況設定の単問の特性を活かした問題と評価できる。
- ・継続雇用制度に関する記述や定年退職者と継続雇用労働者の増加する傾向から、55 歳以上の高年齢労働者は 65 歳まで働く可能性が高く、そのことを踏まえた上で、単に転倒を予防するというのではなく、企業利益も追求しながら労働災害の発生率を減らす対策を考えさせるという産業保健における公衆衛生看護活動の特性を活かした問題である。

より良問とするための改善の方向性：

- ・状況文で、「転倒が多かった」までを記載するのではなく、保健師として実践すべき対策を判断するための情報を記載することに留めることで、受験生が情報から対策を判断する思考のプロセスを踏むことができると考える。
- ・例えば、年齢と労働災害の発生状況を表に示すことや、転倒が起りやすい場所を図で示すなどにより、対策を考えるための情報を表や図で示すと、必要な情報を取捨選択させるという状況設定問題の単問の特性を活かした問題となると考える。
- ・A 作業場と B 作業場を写真などの視覚素材で示し、情報を比較することにより、対策を考えさせることも可能ではないかと考える。

4—— 考察

保健師国家試験の良問についての定性分析を行った結果について、定量分析と同様に、改善部会報告書での提言に沿って検討する。

1 | 保健師国家試験全体から見た良問の特徴

保健師国家試験 103 回から 105 回の 3 年間の問題のうち、良問と判断されたのは各年 15%～21%の範囲で、3 年間の平均は 17%であった。他の国家試験と比較をしていないので、この割合が相対的に高いのか低いのかの判断はできない。しかし、受験生の立場、また保健師の質を保障する観点から考えれば、少なくとも半数以上は良問であってほしいと期待する。保健師の活動の幅は広く、かつ実際の活動の場では日常の生活は多くの状況的な要因が絡み合う複雑さがあるので、その対応は個別の状況を多面的にアセスメントし、いくつかの方法を併存して考える。国家試験では一つまたは 2 つの正解を求めるという出題形式の問題にしなければならず、正解は一つではない現場の活動を試験問題にすることの難しさがある。

各出題領域別の出題数の 3 年間の合計をして良問の割合を見ると、最も割合が高かったのは対象別公衆衛生看護活動論で 33%、疫学 26%、健康危機管理 21%であった。これらの領域は比較的良問が作りやすい領域であったといえる。一方、公衆衛生看護方法論 I、公衆衛生看護方法論 II、学校保健・産業保健は 10～17%であり、公衆衛生看護学概論、公衆衛生看護管理、保健医療福祉行政論では良問に選択された試験問題はなかった。具体的な保健師の活動場面が設定されている問題が

良問として選択された。

今回、良問として抽出された中で難度の低い試験問題が2題含まれた。これは抽出過程において、連問を前後して採用したためである。連問の場合、2連問、3連問ともに最後の問題の難易度が低くなっており、連問作成の難しさもみられた。

2 | 保健師国家試験における良問の特徴と課題

(1) 出題内容について

出題領域は、55問中の比較では、対象別公衆衛生看護活動論からが最も多く、半数以上を占めていた。次いで、疫学、健康危機管理の順で10%以上であり、公衆衛生看護方法論Ⅰ、公衆衛生看護方法論Ⅱ、学校保健・産業保健であった。

対象別公衆衛生看護活動論からが最多であったのは、出題割合も全体の3割弱で最も多いことが背景にある。対象別公衆衛生看護活動論は保健師の実際活動で対人支援の内容を扱う領域であり、保健師の基本的な実践活動での知識や判断を問うには適しているといえる。さらに、中項目を見ると、「母子保健活動」、「母子保健」、「女性の健康支援」の問題が多く、学生に適した問題として抽出された。この領域の問題が良問とされた背景には、多くの学生が実習でも体験していることが考えられ、基礎的な能力を問う国家試験問題として適切であったと評価できる。

但し、良問がこの領域に偏る傾向があり、公衆衛生看護方法論Ⅰ、公衆衛生看護方法論Ⅱでの保健師の活動方法について問う問題で良問の割合が増えること、保健医療福祉行政論での行政的な判断や支援を問う問題でも良問が作られることが今後の課題である。

(2) 状況設定問題について

良問のうち80%が状況設定問題であり、状況設定問題自体の割合が年間110問のうち35問(31.8%)であることからすると、高い割合で抽出されたといえる。保健師の活動の実際場面は、複雑で多様な要素が顕在・潜在し、多くの情報から必要な情報や重要な情報を判別して選別し、その意味付けを他の情報と関連付けて判断して、その事例やその状況に適した支援を行う。このような状況を紙上で再現するには、多くの情報を含む状況設定問題が適している。また、時にはほとんど情報がない初対面の事例に出会い、白紙の状態から情報収集をすることもあり、優先すべき収集情報は何かという判断も重要である。これらは連問として課された試験問題であった。

(3) 出題形式について

4肢択一、5肢択一問題が96%であり、大半が択一の選択をする問題で、数値は疫学の1問のみであった。図表1より全体の10年間の問題の分析では、4肢択一64~75%、5肢択一5~15%で、この2つの形式の合計は72~85%であった。良問に抽出された問題は、高い割合で択一形式の問題が抽出され、解答の選択肢が明快に1つとなる問題であった。

また、設問の形式は正誤(適切を含む)40%、最適度35%、優先度24%であった。正誤や最適度を問う問題が多く、良問は明快な解答を求める問題であるといえる。さらに、図表7より全体の10年間の問題の分析では、正誤62~47%、最適度26~43%、優先度7~14%出題されていた。この割合と比較すると、正誤を問う問題の割合がやや少なく、優先度を問う問題の割合が多くなっていった。保健師の活動場面では唯一正しい判断や方法があるわけではなく、状況に応じて優先するこ

とを考えることが実践力を問うことにつながっていたと考えられる。

(4) 評価領域分類 (Taxonomy) について

今回の分析方法では、良問として評価領域分類はⅠ型以上を選択しており、評価領域分類Ⅱが55%で最も多く、次いで評価領域分類Ⅲが26%であった。改善部会の報告書でⅡ型やⅢ型を増加することが提言されていることからすると、適切といえる。しかし、今後は、より実践場面での問題解決を紙上で再現し、学生が思考できる問題であるⅢ型を多くする工夫が必要である。

(5) 視覚素材・図表について

文字以外の情報である図表の活用は、55問中あり14問(25%)であった。図表20より10年間での表の活用42問、図の活用16問、別冊図表1問で、合計59問(18%)であった。良問に抽出された試験問題はより図表を活用した問題が多い割合であったといえる。図表を活用することで、データを理解し、その意味を志向し分析するという過程が含まれることが良問と判断されることになったと考えられる。

3 | 状況設定単問の特徴と課題

(1) 単問の状況設定問題について

単問で出された状況設定問題4問について詳細に分析した。これらの4問は良問として抽出された中には含まれなかった。3年間で4題しかないため単問の状況設定問題の是非について論じることができないが、単問の状況設定問題を分析した結果、単問状況設定の課題と今後の改善の方向が明らかになった。

試験問題の題材は、現実の社会で健康課題となって取り組まれている事象を取り扱っており、改善部会報告書にもあるように、保健師として社会背景を踏まえた出題となっていた。

設問の意図は、状況を設定することで具体的になっている。しかし、どのように状況を設定するかによって設問の意図がぶれることもあり、試験問題として何を問うのが重要である。

設問の意図に対し、解答に必要な知識は、情報を総合的に判断するというよりも、ある一つの基準となる知識を確実に理解していれば正解を導き出せる問題が多く、難度が高くなかった。

提示された情報の要素は、それぞれの状況設定に合わせて、母子保健における家族背景を踏まえた妊婦支援の事例、保健所における医療安全支援センターの役割機能、産業保健における健康管理室での腰痛対策の職場事例、高齢労働者の労働災害防止対策の事例を具体的に説明するものであった。状況を設定することで、受験生が具体的に場面をイメージすることができることで、情報の判断の仕方や取捨選択の仕方が問われた。正しい判断ができるか、状況に混乱させられるかという判断を問うことができる。しかし、今回の設問では解答の選択肢の設定で、魅惑肢の設定が難しく、その状況下で最も重要なことや優先度を判断できる学生にとっては、難易度の低い問題になったと推察される。

評価領域分類 (Taxonomy) は、Ⅲ型が2題、Ⅱ型とⅠ型が各1題で、必ずしも高いレベルではなかった。状況設定をしたからこそ、評価領域分類 (Taxonomy) Ⅲ型の問題になるような工夫が必要である。

(2) 状況設定問題での良問の要件

何を良問としたのかの要件も重要な論点である。今回は評価領域分類 (Taxonomy) を I 型以上としたが、国家試験の出題意図からすると、改善部会の報告書にも示されているように、評価領域分類 (Taxonomy) II 型以上を良問とすることが望ましい。また、良問選定要件としては、全保教国家試験委員会での 8 つの観点と、改善部会報告書で提案された出題内容として新たに提示された 2 点とした。すべての試験問題がすべての項目に該当しているのではないため、今後は良問の要件の見直しも必要である。

良問を分析した結果、良問を回答するにあたり必要な能力として 11 項目が抽出された。これらの 11 項目が良問の要件とも考えられる。この 11 項目で抽出された内容をみると、大きく 5 分類できる。第 1 に、課題を明確にするために、情報の追加・探索的思考という収集段階、情報の優先度や重要性の選別、個々の情報の判断と総合的な情報の判断を行うというアセスメントの過程での能力があげられた。これは、情報収集力とその断能力を問うものである。第 2 に、適切な支援の判断、必要な活動・対策の判断という実践過程での計画立案と実践に関する判断能力であった。この二つの能力は、実践の基本となる能力であり、多くの良問がこの 2 つの能力を内容としていた。第 3 に、多職種・他機関連携、地域ケアシステムづくり、健康課題の事業化・施策化についてで、改善部会の報告書で保健師活動の特性として提案された内容であった。これらは、対人支援の保健指導中心の活動から保健師の活動が変化していることを反映した内容であったといえる。第 4 に、時代が要請する健康課題、支援が必要な対象理解では、格差社会における新たな健康課題、健康危機管理などの新たな課題に注目した内容であった。基本的な支援活動だけでなく、社会的な視野を求めるものであった。最後に、統計学的分析の活用があげられた。地域診断をはじめとして、エビデンスに基づいた判断を行い、感染症のみならず社会疫学や行政疫学をも含めた統計を活用した実践は今後ますます必要となる。

良問とは、受験生に何を求めるのかという点からは、問題において問いたい能力が何であるかが最も重要である。さらにそれをどのような形態で設定することで良問となるのかという作問技術の観点から検討する必要がある。

単問の状況設定問題の分析からは、作問の技術、特に選択肢の作成においていかに魅惑肢を作成できるかが重要であることが示唆された。

実践者を養成することが保健師教育の目的であるため、対象別公衆衛生看護活動論などの状況設定しやすい問題が良問として多く選択されたが、公衆衛生看護方法論 I や公衆衛生看護方法論 II のように、総論的な基本となる領域からの良問も基礎力を確認するためには必要である。これらの領域での良問を作り出すためには、学問としての公衆衛生看護学の体系化と深化が良問を生み出すベースになると考えられる。国家試験出題基準の整備と合わせて、公衆衛生看護学の構築が大切である。

本調査では、公表されたデータをもとに分析を行い、一問ごとの正解率や識別指数は検討できていないので、試験問題の成果として良問を検討するには至っていない。

5— 研究のまとめ

1 | 保健師国家試験の改善に向けて

実践能力を備えた保健師の養成のためには、実習の強化が望まれるが、保健師助産師看護師学校養成所指定規則では臨地実習は5単位であり、十分な体験ができているとはいえない。各教育機関では、演習やシミュレーション教育などで模擬体験を取り入れ、判断力や具体的支援の能力を育成している。また、対人支援のみならず、地域や地区への支援、組織活動の支援、さらには施策化能力が強く求められるようになった。対人支援においては、新人保健師であっても一人で行動し、的確なアセスメントと適切な支援を行わなければならない。複雑な状況の事例が増加する中では、さらに多様な環境と状況を判断し、多職種、他機関と連携することができなければならない。

地域での活動においては、地域アセスメントは他分野でも実施されるようになり、保健師には疫学や保健統計を活用し、医学的社会的視点を持った判断が求められるようになった。地域アセスメントを表面的に行うのではなく、保健の専門家として健康課題を提示し、政策に反映できる能力が求められている。

これらの社会変化を踏まえると、複雑な状況での情報の取捨選択と情報を統合しての総合的な判断ができること、保健師の活動の対象となる人々の成長発達や健康状態をエビデンスに基づいてアセスメントし支援の必要性を適切に判断できること、保健行動や生活への支援について応用性を活かして個別の状況に合わせた支援を実施できることが問われる。また、疫学や保健統計、行政学や法律の基礎知識を、地域アセスメント、事業計画立案、保健師活動の評価に実際に活用できることが問われる。情報化社会において、正確なデータの算出とデータ加工、データの読解力がますます重要となる。

試験問題の量的・質的分析結果から、保健師国家試験の改善に向けての具体的な提案として、以下の点があげられる。

(1) 実践力を評価できる問題の作成に向けて

○質の高い状況設定のある問題を増やすこと

単問でも連問でも形式は問わないが、ある特定される具体的な状況のイメージがもてる事例を設定して、観察力と判断力を問う。状況が特定されるためには具体的な多くの情報が必要となる。状況が特定されれば、適切な具体的な支援方法についても問うことが可能となる。

これらは評価領域分類のより高いレベルであるⅢ型の問題作成につながる。

そのためには、一問の文字数が多くなることが予測されるが、全体としての総文字数が25,000文字程度であれば、学生の読解力で対応することは可能と考える。

○図表や視覚素材の活用を促進すること

より実際に近い状況を示すためには、写真やイラストの活用を検討する工夫が必要である。例えば、乳児訪問での皮膚の状態の写真からの判断、4カ月健康診査時での定頸のアセスメント手技、高血圧指導での食材の図(絵)から見る塩分量、家族関係図、地図から見る地域アセスメントなど保健師活動の可視化と合わせて工夫の余地がある。

(2) 論理的思考と推論および判断力を評価できる問題の作成に向けて

○論理的思考を問うために非選択式の計算問題や簡単な記述を増やすこと

計算問題を回答するためには、正確な基礎知識と疫学や統計などの具体的活用方法の理解を問うことができる。実際に作業を行うことで、学生の能力を正確に測定することができる。

計算問題だけでなく、単語レベルで回答を記述する問題も工夫次第では可能である。重要な概念や理論などを問うことができる。

○図表を活用したデータの判断を促進すること

集団や地域を対象にした活動では、アセスメント、計画、評価において研究的な手法を活用する。施策化、特に保健福祉事業の一連の過程を行う能力の強化が、今回の指定規則改正で求められており、データを正しくかつ公衆衛生看護活動に意味づけて読み取り判断する能力を問う問題で図表の活用がより図られるとよい。

○試験問題の分量としての総文字数の設定について

論理的思考には、必要な情報を取捨選択して時間的順序性や空間的な状況、関係性を整理し、因果関係を推論して、原因を判断したり、結果を予測することが含まれる。直感ではなく思考過程を踏むことが必要であり、読解力がその基盤に必要となる。したがって、一定の時間内にある程度の文章を読みこなす能力も必要である。

(3) 実践力を問う問題とするための提案

○状況設定問題における難度を維持すること

個別状況においてアセスメントを行い状況に合わせた介入を判断する能力、つまり思考や判断プロセスを問う問題を積極的に出題するためには、例えば1問目で情報収集からアセスメントすることを問い、2問目で判断や適切な方法を問うことになるが、最後の問題で難度が低くなると、思考のプロセスを踏めたかを確認できず実践能力を評価できない可能性がある。作問の難しさはあるものの、状況に合わせて単問、2連問、3連問のどれが適切な出題形式かを選択し、状況設定問題における一定の難度を維持できるとよい。

○保健師の活動方法について問う問題での良問を増やすこと

良問は、対象別公衆衛生看護活動論からが最多となっており、出題領域が偏る傾向がみられた。保健師活動の基本となる技術である公衆衛生看護方法論Ⅰ、公衆衛生看護方法論Ⅱで良問の割合を増やすこと、行政的な判断や支援を問う保健医療福祉行政論での良問を増やすことで、保健師が対象に合わせてどのような方法を用いるのかという実践力を問う必要がある。

○良問としての要件の見直しの必要性

本分析では、評価領域分類 (Taxonomy) I型以上のうち、全保教国家試験委員会での8つの観点と、改善部会報告書で提案された出題内容として新たに提示された2点を総合的に研究者らで判断して良問とした。良問の要件については明確な基準がなく、出題の意図や問いたい能力が明確であることは当然であるが、それをどのような形態で設定することで良問となるのかという基準を検討することで、作問側の技術を向上させることも必要である。

(4) 分析の課題

国家試験の目的は、医師国家試験、薬剤師国家試験、保健師助産師看護師国家試験などどの国家試験においても、その職種としての実践能力と職種としての基本的な資質を確認することであり、

試験についての改善が図られてきたが、実践能力を筆記試験で問うことや最低限の知識のコンセンサスを得ることなどの課題がある(医師国家試験改善部会報告書;2015、赤木;2016、神代ら;2012、井廻;2015、栗原;2016、)。

保健師国家試験について難易度分析がなされ(酒井ら;2014)、保健師国家試験問題としての適切性の課題を述べている。筆記試験で実施する国家試験において、実践能力を問うにはどのような設問形式が良いのか、どのような内容が良いのか、どの程度の難易度が適切なのかに関しては、一問ずつの質的な分析とKV調査の結果を総合的に分析し、判断しなければならない。

文献

医道審議会保健師助産師看護師分科会：保健師助産師看護師国家試験制度改善検討部会報告書.2016. <https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10803000-Iseikyoku-Ijika/0000115632.pdf>

医師国家試験改善検討部会報告書.2015.<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10803000-Iseikyoku-Ijika/0000079678.pdf>

赤木美智男：医師国家試験-現状と課題.医学のあゆみ 256 (11), 1165-1172.2016.

神代龍吉、他：医師国家試験のあり方に関して.医学教育 43 (6), 455-456.2012.

井廻道夫：医師国家試験の変遷と今後の方向.日本内科学会雑誌 104(12), 2527-2532.2015.

栗原順一：薬剤師国家試験の実施状況と課題.ファルマシア 52 (7), 656-658.2016.

酒井陽子、他：保健師国家試験の難易度分析.看護教育 55 (1), 40-45.2014.

総括および提言

1— 保健師の質向上に向けた保健師国家試験の課題と提言

1 | 保健師教育と保健師国家試験

保健師教育においては、少子高齢化の進展、健康格差の拡大、頻発する災害、国際的な感染症対策、虐待など複雑で深刻な健康問題に対応できる公衆衛生看護の高度な実践能力が求められている。保健師の実践能力を強化するため、2009年の保健師助産師看護師法の一部改正により、保健師及び助産師の国家試験受験資格のための教育期間は6か月以上から1年以上に延長となった。また2010年には、「保健師教育の技術項目と卒業時の到達度」（厚生労働省、2008）を改訂した「保健師に求められる実践能力と卒業時の到達目標と到達度」（厚生労働省、2010）（以下、卒業時到達目標とする）が提示された。加えて2011年には保健師助産師看護師養成所指定規則が改正され、保健師国家試験受験資格取得に必要な単位数は、23単位から28単位となり、実習科目の単位数も4単位から5単位へと増加した。

一方で、2009年の保健師助産師看護師法の一部が改正され、従来の専修学校、短期大学専攻科などの1年の教育課程や学部での全員必修の教育体制に加え、学部選択制、大学専攻科、大学院での教育が実施されるようになり、多様な教育課程で保健師教育が展開されることとなった。このように保健師教育課程が多様化しても、保健師国家試験において保健師に必要な知識および技能を評価することは、保健師の実践能力を担保する上でも非常に重要である。

保健師には、健康課題を生活の場で捉え、人々に寄り添う看護活動と同時に、地域を俯瞰して課題を分析し、地域ケアシステムの構築や地域のしくみを創造する地域を対象とした看護活動の展開が求められる。個人・家族・集団・地域において、多くの情報を収集し、多角的にアセスメントし、支援計画を立案することができる能力を獲得しているかどうかを判断するのが、まさに保健師国家試験であると言える。またそうした活動の基盤となる実践能力の獲得にむけ、より効果的な教育方法の開発と実践は、保健師教育機関の責務である。

ここでは、2つの研究から明らかになった結果を統合し、保健師の質向上に向けて今後の保健師国家試験への提言を行う。

2 | 保健師の質向上に向けた保健師国家試験において改善すべき事項

(1) 出題領域について

保健師の活動の実際場面は、複雑で多様な要素が顕在・潜在し、多くの情報から必要な情報や重要な情報を判別し、その意味付けを他の情報と関連付けて判断して、その事例やその状況に適した支援を行う。また、時にはほとんど情報がない初対面の事例に出会い、白紙の状態から情報収集をすることもあり、優先すべき収集情報は何かという判断も重要である。このような状況を紙上で再現するには、多くの情報を含む状況設定問題が適している。

本研究の結果から、良問のうち80%が状況設定問題であり、状況設定問題自体の割合が年間110問のうち35問(31.8%)であることからすると、高い割合で抽出されたと評価できる。

一方で、状況設定の連問では、2連問、3連問ともに最後の問題の難易度が低くなっていたことや、対象別公衆衛生看護活動論などの状況設定しやすい問題が良問として多く選択された。一定の領域に偏ることなく、公衆衛生看護方法論Ⅰや公衆衛生看護方法論Ⅱのように、総論的な基本とな

る領域からの良問も基礎力を確認するためには必要であり、領域に偏ることなく問題数を担保し、良問としていくことが必要である。

保健師教育において、虐待やDVなど個人・家族に対する健康危機に対応できる能力と、システム構築を中心的に担える能力を備えた保健師の育成が課題であることが指摘されている（全国保健師教育機関協議会，2018）。保健師助産師看護師国家試験改善検討部会報告書では、保健師国家試験について、健康問題の複雑化や健康格差の拡大の社会背景を踏まえて、地域住民や多職種・他機関と連携・協働しながら、健康課題を解決すること及び施策化することなど、医学や公衆衛生の知識を含めた公衆衛生看護活動の根拠となる知識の出題、保健師免許を基礎資格とする産業保健や学校保健で業務に必要な知識や能力を問うことなどが提言されている（医道審議会，2016）。

今後、公衆衛生看護方法論Ⅰ、公衆衛生看護方法論Ⅱでの保健師の活動方法について問う問題で良問の割合が増えること、保健医療福祉行政論での行政的な判断や支援を問う問題でも良問を作成していただきたい。

（2）評価領域分類（Taxonomy）について

本研究の結果から、評価領域分類は、2015年以降一貫してⅠ型とⅠ'型が60%程度を占め、Ⅱ型が30~35%、Ⅲ型は5%前後であった。報告書では、出題類型を明確にして、出題意図を明確にする必要があること、状況を提示する情報は判断や介入に必要な情報のみならず、情報を取捨選択することも含めて問う必要があること、個別状況においてアセスメントを行い状況に合わせた介入を判断する能力、つまり思考や判断プロセスを問う問題を積極的に出題すること、状況設定問題では、評価領域分類レベルⅡ以上の問題を出題することが提言されていた（医道審議会，2016）。状況設定問題が3割程度出題されているので、評価領域分類レベルでⅢ型を増加させる工夫が必要であろう。

また報告書では、写真やカラーによる出題、イラスト・図表の積極的活用が提言され、保健師国家試験の具体例として地域診断に必要なグラフ化されたデータや表をもとに判断を問うことが示された。しかし本研究の結果から、図表に関して、保健師国家試験の特徴は問題文内に表が配置されることであり、別冊で提示されることはほとんどなかった。図表の数に関しては、2017年以降、3~9個で、保健師のとして必要な活動場面で出会うある状況の観察の判断などを、別冊の写真や図による出題を増やし、問題文内での図の活用をさらに精選させることで評価領域分類レベルのⅢを増やすことにもつながると考えられる。保健師の活動場面では唯一正しい判断や方法があるわけではなく、状況に応じて優先することを考えることが実践力を問うことにつながっていたと考えられる。今後は、より実践場面での問題解決を紙上で再現し、学生が思考できる問題であるⅢ型を多くする工夫が必要である。

（3）文字数について

看護師等養成所の運営に関する指導ガイドラインにおいて「保健師の技術については、助産師や看護師のテクニカル・スキル（手技）としての技術とは性質が異なり、実践能力と切り離して表すことが難しい」とされ、「保健師の技術は広範囲であり、大項目や中項目のみならず、小項目の中にも含まれている。実際の保健活動では、個人や家族、地域（集団／組織）の状況に応じてそれらを複数組み合わせ提供する」と明記された（厚生労働省，2019）。

実践能力を問うためには、状況を確定したうえで情報の取捨選択の過程が問えなければならないため、必然的に文字数が増加せざるを得ないと考えられるが、問題文の総文字数の最高はこれまで助産師で約 24,500 文字（2017 年、2018 年）であったことから、この程度を最大にすることで、受験生の負担を増やすことを回避できると考える。しかし今後、より多く良問を作成するために、文字数における限界も生じる可能性があり、継続的に検討が必要である。

（４）出題形式について

『状況設定』の内訳では、2019 年には保健師、助産師は「2 連問」が、看護師は「3 連問」が最も多かった。看護師国家試験では、看護基礎教育として正しい知識を問う問題が出題される傾向にあるが、保健師国家試験では状況における判断や対処を問うているといえ、必ずしも 3 連問を出題するというのではなく、出題の意図や場面に応じて 2 連問や単問での出題とするなどの工夫が必要であると考えられる。

単問の状況設定問題の分析からは、作問の技術、特に選択肢の作成においていかに魅惑肢を作成できるかが重要であることが示唆された。試験問題の題材は、現実の社会で健康課題となって取り組まれている事象を取り扱っており、保健師として社会背景を踏まえた出題となっていた。状況を設定することで、受験生が具体的に場面をイメージすることができ、情報を取捨選択し必要な情報から、正しい判断ができるかという思考のプロセスを問う問題となっていた。魅惑肢の設定が難しいことや、情報をどこまで記載するのかについて、受験生の習熟度や実習での体験をある程度踏まえる必要性を検討したうえで、状況下で最も重要なことや優先度を判断できる実践力を問う問題として、3 連問、2 連問、単問のいずれで問うことが適切なのかを出題の意図や場面に応じて選択して出題することが望ましい。また、今後一般問題との相違、状況設定方法、魅惑肢の作成など、作問の技術を高めることも課題である。

（５）時代の要請や複雑化した課題について

保健師に求められる実践能力は、いずれも地域包括ケアシステムにおいて発揮されるものであり、差し迫る今日的課題、将来的に起こりうる未知の脅威に立ち向かうことができる保健師を育成するには、なお一層これらの能力を高める教育が必要である。また災害、虐待などの健康危機管理に対応するために、システム構築を中心的に担える能力を備えた保健師の育成が必要であり、多機関・他職種と連携して企画・実施・評価できる実践能力を備えた保健師を輩出することは、保健師教育機関にとっても取り組むべき教育課題である。

しかし本研究の結果から、多職種協働・連携に関する問題や、ケアシステム構築などに関する状況設定の良問が少ないことが明らかになった。近年の大規模災害が頻発している状況や新型コロナウイルス感染拡大防止、虐待や DV など個人・家族に対する健康危機は、背景要因が複雑化しており、対応するための基本的な知識・技術を一般問題として問うだけでなく、多様な健康危機に対応できる実践能力を評価するためには、状況設定問題としての出題が必要である。これらの状況を出題するためには、多くの情報を提示し、それを統合して判断する思考が求められ、状況設定として出題するにはふさわしい問題となると考える。

3 | 実践能力を問う保健師国家試験問題作成のための保健師基礎教育の課題

状況設定問題として、時間経過とともに保健師の支援過程を問うのであれば、個人・家族の支援から集団・地域への支援へと連動した活動展開を学生に実践させる必要があり、そのためには数か月～1年以上の実習期間が必要であると考えられる。学生が地区を長期にわたって受け持ち、担当地区内での個人・家族への支援とともに地域への支援を実践することで、地区活動の展開方法を学習できる内容が必要である。そのような地区活動の学習では常に個人と地域への視点を併せ持つこと、個人への支援と組織的アプローチを組み合わせる支援の展開を経験することができると考えられる。

保健師国家試験問題の状況設定問題の評価領域分類レベルを上げることは、すなわち実習における体験を増やし、長期間地域に出向き関わるといふ実習を体験させることと連動させながら達成していくことでもある。改善部会の報告書では、保健師の問題について、「地域診断における判断や介入の優先度を問う問題などが適しており、地域診断に必要なグラフ化されたデータや表などをともに保健師に必要な判断力を問うような出題が望ましい」と報告している（医道審議会，2016）。単に講義から演習、さらに演習から実習へという一方向的な進展ではなく、講義科目、演習科目、実習科目を相互に関連させ、理論と実践技術の学習を螺旋的に深める手法をとることや、実習においては、小地域の地域診断をもとに、地域課題の解決を検討すること、演習課題として実習施設の課題を検討することにより、保健活動の見学・体験に留まらず、地域の関係者や地域住民への聞き取りなど、学生が地域住民や地域の関係者への働きかけや協働を体験する取り組みを行い、地域との相互作用による学習を重視していくことが重要である。このような学習により、実際の地域の事例を状況設定文として示し、地域診断の結果から適切な手法を用いて地域活動を展開するという思考のプロセスを踏む問題をより増加させることが可能となる。

しかし、実習における体験は重要であるものの、健康危機管理に関する内容などは臨地で体験できるとは限らない。そのため、ケースメソッド手法やシミュレーション教育手法などの多様な教育手法を用いて、学生がより能動的に学ぶ工夫をすることで、実習で体験していない状況であっても学生にイメージさせ、出題することが可能であると考えられる。保健師国家試験問題の状況設定文の良問を増やすためには、学生への教育方法の開発・改善を推進することも重要である。

4 | 保健師国家試験問題の出題形式の検討と今後の課題

看護師等養成所の運営に関する指導ガイドラインにおいて「保健師の技術については、助産師や看護師のテクニカル・スキル（手技）としての技術とは性質が異なり、実践能力と切り離して表すことが難しい」とされ、「保健師の技術は広範囲であり、大項目や中項目のみならず、小項目の中にも含まれている。実際の保健活動では、個人や家族、地域（集団／組織）の状況に応じてそれらを複数組み合わせ提供する」と明記された（厚生労働省，2019）。保健師国家試験問題は、現在助産師と同様に110問であり、そのうち3割強が状況設定問題であるが、保健師の技術がテクニカルスキルではないことから、保健師においては、一般問題数を減らし、状況設定問題数を増やすこと、あるいは状況を付した一般問題において文字数を増やすことなどにより、多くの情報から必要な情報を取捨選択し判断するプロセスを踏ませる問題をより増加させることも一案ではないかと考える。

改善部会報告書では、保健師の問題について、「地域診断における判断や介入の優先度を問う問

題などが適しており、地域診断に必要なグラフ化されたデータや表などをもとに保健師に必要な判断力を問うような出題が望ましい」と報告している（厚生労働省，2016）。保健師において技術とは、個人・家族・集団・地域に関する多くの情報から、多角的にアセスメントし、複数の方法を組み合わせることで実践することである。保健師の実践能力を問うためには、一般問題で問える問題ももちろんあるが、状況設定問題が不可欠である。また保健師が直面する問題は、必ずしも時間的に経過をみて対応できるものだけではなく、初見で対象から情報収集しアセスメントし判断するという場面も多い。そのような状況を問うためには、一般問題と状況設定問題という形式では必ずしも問えない可能性がある。保健師国家試験問題については、既存の出題形式にとらわれず、保健師の技術を評価するための最善の出題形式を今後継続的に評価し検討する必要がある。

また保健師国家試験において良問を多く作り出すためには、学問としての公衆衛生看護学の体系化と深化が良問を生み出すベースになると考えられる。国家試験出題基準の整備と合わせて、公衆衛生看護学の構築が大切である。

文献

厚生労働省. (2016). 医道審議会保健師助産師看護師分科会 保健師助産師看護師国家試験制度改善検討部会報告書

URL ; <https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10803000-Iseikyoku-Ijika/0000115632.pdf>
(検索日：2020年3月31日)

厚生労働省医政局看護課 (2019)：看護基礎教育検討会報告書，

<https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf> (検索日：2020年3月31日)

全国保健師教育機関協議会 (2018)：平成29年度厚生労働省医政局看護課看護職員確保対策特別事業，保健師学校養成所における基礎教育に関する調査報告書，

URL; <http://www.zenhokyo.jp/work/doc/h30-kisokyouiku-chousa.pdf> (検索日：2020年3月31日)

おわりに

看護基礎教育検討会報告書では、保健師助産師看護師学校養成所指定規則の改正案として、保健師基礎教育において実習単位は増えなかったものの、講義・演習科目が28単位から31単位に増加することが示された（厚生労働省，2019）。具体的には、「昨今の災害の多発、児童虐待の増加等により減災や健康危機の予防・防止が重要となっている中、疫学データ及び保健統計等を用いて地域をアセスメントし、それらの予防や防止に向けた支援を展開する能力の強化が求められている。併せて、健康課題を有する対象への継続的な支援と社会資源の活用等を実践する能力の強化も求められていることから、事例を用いた演習等の充実を図るため、「公衆衛生看護学」を現行の16単位から2単位増の18単位とした」ことと、「ケアシステムの構築や地域ニーズに即した社会資源の開発等を推進するために、施策化能力の強化を目指し、政策形成過程について事例を用いた演習等の充実を図るため、「保健医療福祉行政論」を現行の3単位から1単位増の4単位とした」ことである。

現在、保健師教育課程は約9割が学部選択制であり、さらに多様化が進むことが予想される。しかし、いずれの教育機関にあっても、保健師として最低限の実践能力を問う保健師国家試験のレベルを維持していくことは、保健師の資質向上として重要である。

全保教では、今後の社会情勢の変化と国民のニーズに十分応えることができ、未知の脅威に立ち向かうことができる保健師を国民に理解してもらい、保健師を育成するために、保健師の技術についても明確化する必要があると考えている。一方で、保健師国家試験の内容調査の実施を継続し、より良い問題を作問できる教員の研修等にも尽力しながら、より質の高い保健師を育成することに貢献していく。

保健師の資質向上及び確保に向けた調査・分析事業
報告書

岸 恵美子(東邦大学看護学部・教授)
荒木田美香子(国際医療福祉大学小田原保健医療学部・教授)
坪川 トモ子(新潟青陵大学看護学部・教授)
佐伯 和 子(北海道大学・名誉教授)

令和2年(2020年)3月発行

■ 発行 一般社団法人 全国保健師教育機関協議会
東京都文京区本郷 2-26-11-6

禁無断転載